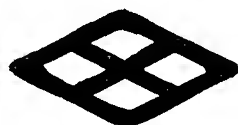
合織糸・合織混紡糸



田村紡績株式会社

社長　田　村　正　衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 四日市 6―2156 (代表)
郵便番号　512

オリンピック・アジア予選

日本開催（11月14日〜28日）にほぼ決まる

三国会議 イスラエルもようやく同意

ミュンヘンオリンピックアジア地域予選は今秋11月日本で開催されることが確定的となった——国際ハンドボール連盟（IHF）からアジア予選出場を義務づけられた日本・韓国・イスラエルの三国による代表者会議は3月26日午後1時から名古屋市中区の朝日ビルで行われ、これまで日本・韓国合同案の「日本開催」に反対の態度を示し自国開催を強く主張していたイスラエルも4時間の議論の末、日韓案に対し「イスラエル選手団の往復旅費の60％を日本が負担する」ことを条件に同意、いちぢは暗礁にのりあげていたこの問題も、ようやく解決、日本協会ではただちに実施細目にわたる検討に着手した。

なお、正式な実施要綱などの発表は韓国、イスラエル両国からの正式承諾書の到着を待って5月下旬に発表される予定だ。

オリンピックアジア予選日程（日本協会案）

11月14日（日）	日本—イスラエル（東京体育館）
17日（水）	韓国—イスラエル（東京体育館）
20日（土）	日本—韓国（大阪市中央体育館）
	〜以上第1次リーグ〜
23日（火）	日本—イスラエル（愛知県体育館）
26日（金）	韓国—イスラエル（駒沢屋内球技場）
28日（日）	日本—韓国（駒沢屋内球技場）
	〜以上第2次リーグ〜

日本協会としては悪戦苦斗の末にこぎつけた「日本開催」である。

2月19日から東京で開催を予定していた三国会議が、直前になってイスラエルからの欠席通知で無期延期（本誌84号詳報）となり、いちぢは日本、イスラエル案が平行線のまま解決の糸口は容易に見出せぬのではないかとさえいわれていたのだが、事態の重大さと早急に結論を得ようとする日本協会は3月7日の全国評議員会で「3月28日から名古屋で行われる第31回世界卓球選手権に出場のイスラエル選手団役員と交渉をもってはどうか」という意見が出され、イスラエル側の意向を打診した結果、了解を得られたためただちに韓国協会に連絡をとり、今回の会議となったものである。

会議には、イスラエルからヤコブ・ピラン氏（同国オリンピック委員）、韓国から洪淳泰氏（韓国ハンドボール協会副会長）日本から田村正衛会長、荒川清美理事長、久田暁国際部長（常務理事）が出席、栗脇巌、田中滋章両常務理事がオブザーバーとして同席した。

日本案（注・韓国はすでに日本開催に同意＝本誌82号詳報）、イスラエル案とも、三ケ国総当り2回戦制、開催時期は今秋11月という点で共通していたが、選手団（役員2、選手16）の旅費負担額で議論となり、自国開催の場合は40％負担を表明していたイスラエルが、日本開催の場合は80％の提供を要求、いっそうこじれたものになった。

日本は、11月の韓国との話合いで30％負担という線で了解を得ており、イスラエル側にもこの数字を示していたのだが、2月6日になって突然イスラエルから「40％」という日本案を上廻る提案が示された。日本協会は3月6日の全国理事会で再協議の結果「日本誘致のためには40〜50％の負担はやむを得ない」という申し合せを行い田村会長らも、それを背負って会談に臨んだわけだが、イスラエル側の強硬態度についに「60％」という新提案を出さざるを得なくなり、ようやくにして三ケ国の同意をみるにいたった。韓国に対する負担額は当初案どおり30％である。

ピラン氏はこの日の会議の同意事項を本国に持ち帰り5月10日までにイスラエル協会の正式な回答を寄せることになっている。

※

今後の問題は当初目論んだ予算額をはるかに上廻ることになった大会資金の調達と、万全な大会運営をはたすため準備体制の強化を一日も早く固めることであろう。

着々と強化の実績をあげているナショナルチームの成長にひきかえ、運営面はいまだ"ゼロ"の状態である。予選第1日の11月14日まであと百九十八日しかないことを日本協会は肝に銘じるべきだ。

「ハンドボール」4月号（第85号）目次

【表紙写真】大崎電気—グンメルスバッハ戦（4月14日東京体育館・山田真市氏撮影）

グンメルスバッハ貫録の5勝1敗

第8回日独国際親善試合盛況裡に終幕

世界最強のクラブチーム、西ドイツ「グンメルスバッハ」を迎えての第8回日本・西ドイツ国際親善大会は4月7日から4月16日まで全国6都市で6試合を行った。

来日直前、第11回ヨーロッパカップで2連勝3度目の優勝を決めたグンメルスバッハはさすがに当代最高といわれる力と技を存分に発揮、5人の西ドイツナショナルプレイヤーを攻守の軸にして、食い下る日本勢をおさえた。

ミュンヘン・オリンピックを目指す日本勢も各地ではっきりレベルアップのあとを示す善戦を示したが、結局、緒戦で全日本代表チーム（オリンピック第2次候補）が22—11で快勝した以外は、各単独チームともヨーロッパチャンピオンには一歩をゆずり5連敗。グンメルスバッハは6戦5勝1敗の好成績をみやげに4月17日空路帰途についた。

各試合とも多くの観衆がつめかけかってない盛況となり、オリンピックへのムードもいちだんと高まりを示しシーズン初めながらこのシリーズは大成功のうちに終幕した。

全日本の速攻冴え快勝

「シュミット封じ」にも成功

ヨーロッパカップ優勝チーム・西ドイツ「グンメルスバッハ」オイゲン・ハース団長ら一行19名(役員6、選手13）は4月6日午後5時5分羽田着の日航機で来日、羽田空港から国内便に乗りつぎ大阪へ向かい、7日午後6時から大阪市中央体育館で全日本チームと第1戦を行った。審判＝山田計、藤田八郎。観衆約四千。

全日本 22（12—5、10—6）11 グンメルスバッハ

	【全日本】		得
GK	本田	（大阪イーグルス）	0
FP	飯田	（大崎電気）	2
	木野	（ワクナガ薬品）	4
	野田	（大同製鋼）	6
	斎藤	（群馬教員ク）	2
	氷海	（日体大）	1
	藤中	（大同製鋼）	4
	中井	（〃）	0
	花輪	（中央大）	1
	東	（大崎電気）	0
	平岡	（東京教員ク）	1
	早川	（ワクナガ薬品）	1
	近藤	（大崎電気）	0

得	【グンメルスバッハ】	
0	カーター	GK
0	ハマン	GK
0	J・ブラント	FP
2	リンゲルバッハ	
2	ボルター	
1	フェルドボフ	
4	シュミット	
0	K・ブラント	
1	ケラー	
1	ベステベ	
0	ブラウンシュバイク	

7MT＝全日本 0、グンメルスバッハ 1

後記

村田弘（全日本監督）

試合開始30秒、シュミットのマークに気をとられていた隙に、ボルダーに豪快なジャンプのロングシュートを決められた。これは、前途多難を思わせ観衆に〝アッ〟と驚きを与えた。シュミットに対し、体格の大きい斎藤をマンツーマンさせた。（シュミットも当然の様子であった。）開始から両チームとも出方を伺うのか、積極的でなかった。5分、2—1とリードされたが、7分木野の見事な相手の虚をついたシュートが決まり、2—2となる。この辺より、両チームは、攻撃、防御が活発な動きとなってきた。8分、ゴールキーパーのカータが味方ミスから、全日本速攻のボールを取ろうと、ハーフライン近くまで跳び出し、斎藤と激突し負傷退場した。これが選手の志気に大きく影響した。足が重く、動きが思うようにいかず、シュートが、決まらない。その上、凡ミスが目立った。全日本は、20分後、帰陣のおくれるところを、連続得点をした。グンメルスバッハは、シュミットが斎藤の激しいディフェンスに合い、動きが鈍り、前半は、期待に反し、1点のゴールに終った。結果は、個人のシュート力のみの5点をあげただけで、12—5と開いた。

この間、グンメルスは、いつでもいけるという精神的、肉体的ゆるみが、コンディションの不良と相まったことは、事実である。

後半に入るや、グンメルスもなんとか挽回しようと、攻撃テンポを変えてきた。7点をリードしている全日本は、余裕のあるゲーム運びで、15分まで一進一退が続いた。グンメルスも思うようにいかず、点差が縮まらないので、あきらめムードとなり、攻撃防御がチグハグなのに対し、全日本は、15分以後、速攻がよく出たのと、攻撃防御のバランスがうまくいき、思いがけない差をつけて勝利を握った。

前後半を通じ、木野がよくチャンスメーカーとなり、またフェイントからのクィックシュートをいいところで決めた。野田も、速攻によくとび出し、ゴールしたのと、彼の身上とするプロンジョンシュートも決まった。前半、藤中の切れ味のよいカミソリシュートは、良かったが、速攻の時の位置の取り方が悪く、シュートミスが目立った。斎藤のマンツーマンも激しかったが、あれだけやらないと、自分より10cm 20kgも大きいシュミットの得点は阻止できない。その点、よく頑張った。また、シュミットをマークしているとき、あとの5人がよくピストンディフェンスできたし、斎藤をブロックにきた時のコンビもうまくいった。G・K本田も国際試合の経験を生かし、防御とのコンビでよく好守した。新人も、国際試合初経験ながら、リードに落ちつき、思いきったプレーをやっていたことは今後に大きな希望を持たせた。

☆　☆　☆

ヨーロッパカップ三度目の優勝

を数日前に達成し、意気揚々と来日したグンメルスバッハは、ドイツナショナルチームの核をなすゲッターのシュミット、チャンスメーカーのフェルドホフ、ブランド、そして堅実、名ゴールキーパーのカーターを持ち、殆んどの試合に20点以上を得点する攻撃のチームで、その上ディフェンスに全体的な荒さとずるさを持つ超一流のチームであった。

彼らのスケジュール変更により、来日翌日の第一戦は、20時間の飛行機と8時間の時差でコンディションは、最低であり、気の毒であった。（日本チームも、海外遠征すると、このようなスケジュールでやる。）日本遠征の目的は、試合であることは間違いないが、たぶんに、ヨーロッパカップの優勝のごほうび的旅行も兼ねていたことは、事実である。彼らの自信と実力は、たとえどんなコンディションであろうと、全日本なにするものぞという精神的なゆるみが大いにあった。これに対し、全日本は、2度と合宿を行い、この一戦にコンディションを調整し全力をあげた。

ただ全日本は、昨年世界選手権以後、一年間国際試合から遠ざかっているので、スケールの大きいある意味で違った〝試合の感〟が、どこまでもよびもどせるかが、大きなポイントでもあった。

戦前の予想は、なんと言っても、各試合に10点以上ゴールする世界のシュミットを、いかにマークできるか、各選手がボールを握り、自由自在に高度なパステクニックを発揮し、スピードに乗った流動的な攻撃リズムを、どこまでくい止められるか、又、主将ブランドを中心とした守りに対し、全日本がどんな攻撃をしかけ、名キーパー、カーターをどうかわして得点するかにあった。

この試合の勝負を18点とみた。情報からグンメルスは、速攻に弱点があるというので、コンディション不良からくる帰陣のおくれるところで、速攻をかけること。セットオフェンスになったら、ボール保持を長くし、絶対的チャンスを伺い、ノーマークシュートをねらうこと。防御では、シュミットを徹底的にマークして、彼の得点を一点でも少なくすること。同時に、全員が激しく動いて、相手の鋭い動きを止めることと、危険地域の選手をマークすることを作戦とした。

両チームの試合に対する意気込みの差が、勝敗を左右したとも言える。しかし、ヨーロッパカップの優勝チーム、世界No.1クラブチームだけあって、卓越した個人のボールテクニックと保持能力、セットオフェンスの緩急自在な攻撃リズムと縦横の変化に富んだ攻撃威力、これに結ばれる強力なシュート能力は、大いに学ぶべきものがあった。

日本チームは、セットオフェンスの時、ボール保持は良いとしても、選手の動きが少なく、スピードの変化がないのが欠点といえる。

防御は、もっと足で防御しなければならない。へばってくると、手の防御になりがちである。又、攻防において、位置の取り方がまずい。もっと良い位置を獲得するよう練習しなければならない。

昨年よりの合宿で基礎技術、防御技術を徹底してやったのと今回の合宿では、速攻に力をそそいだことでこの一戦に基礎プレーのミスが少なく、速攻がよく出た。そして防御力が増したと言える。

グンメルスバッハも初戦で日本流の判定に馴れていない点から何回かとまどい、そこを全日本チームにつかれる不運もあった。日本のすべてに馴れコンディションの良くなった時点でもう一戦やってもらいたかった。

今回の対戦に対し、西ドイツにいる近森、一宮両君よりグンメルスの詳しいデーターを、送ってもらいこれを参考に練習作戦を立てられた事も、勝因に挙げられる。深く感謝したい。

最後に全日本の目標は一つ〝アジア予選に勝つこと〟。今度の勝利はそのスタートの意味で意義はあったし、今後の強化にも気持ちよくして励んでいける。勝ったからといって安心感はみじんも持ってはいけない、アジア予選出場のイスラエルも韓国もオリンピックの出場権をかけて最高のコンディションでやってくる、この二カ国に勝たねばならないことをしっかりと自分達に言いきかせ、今回グンメルスバッハから学び得たものを生かして今後強化に励んでいかねばならない。

最後に御協力、御支援を頂きました関係各位にこの紙面からお礼申し上げます。

―グンメルスバッハ来日成績―

①	11	（5―12 / 6―10）	22	全日本
②	25	（14―7 / 11―6）	13	全同志社大
③	21	（8―6 / 13―10）	16	大同製鋼
④	23	（13―3 / 10―7）	10	清商ク
⑤	17	（11―6 / 6―5）	11	大崎電気
⑥	24	（8―4 / 16―8）	12	日体大

リードつかのま、全同大

第2戦・全同志社大（京都）との試合は4月8日午後6時30分から京都市体育館で行われた。審判山田計、藤田八郎。観衆約三千。

グンメルスバッハ 25（11―6 / 14―7）13 全同志社大

得	【グンメルスバッハ】		【同志社】	得
0	ハマン	GK	岩田（4年）	0
		GK	二橋（OB）	0
4	フエルドホフ	FP	飯田（OB）	6
1	K・ブラント	FP	中井（OB）	2
4	ベステベ	FP	水野（4年）	1
10	シュミット	FP	松井（4年）	3
0	ライズテ	FP	牧野（2年）	1
2	ブラウンシユバイク	FP	入江（OB）	0
3	ボルター	FP	藤井（4年）	0
0	ケラー	FP	中野（OB）	0
1	リンゲルバッハ	FP	町田（OB）	0
		FP	鳥井（OB）	0
25	（4）	7MT	（0）	13

観戦記

小西博喜（日本協会技術指導員）

前日の全日本戦の動きとはまるで見違えるような力のワザを見せた。対全日本に敗れたグンメルスバッハだが本来の調子をとり戻しつつゴール前のスピードに乗った小さいパスでコンビネーションに鋭さを見せ、完全に全同大を上回った。とくに全同大の飯田、中井以外に長身選手がいないこともあるが、身長差を生かした攻撃は全同大につけいるスキを与えず圧倒

した。

前半、立ち上り全同大は動きにやや堅さがみえ、まずグンメルスバッハのブラントにシュートを許し先行されたが、すぐ松井(現役)が中央から、また飯田がアンダーシュートなど決めて前半12分で4−3、さらに15分にも5−4とわずかに1点のリードを守り善戦した。

しかし、全同大のペースも得点の上ではここまでが精一杯。6−6になった18分ごろからグンメルスバッハの動きが活発に、しかもスムーズになってきた。ベルターが中央から豪快なシュートで得点し、つづいてシュミットが息もつかさぬような7MTを決めて一挙に7ゴールを連取、一気に差をつけた。

後半にはいってもグンメルスバッハの動きはさえ、グングン点差をひろげていく、全同大のディフェンスを強引にパワーで割ってはいり、全員が着実にムラなく得点を重ねた。守っても基本通りの早い帰陣で点差はあいても堅いマークで全同大の攻撃をつぶしていく。全同大はなんとか反撃しようとしたが激しい体当りに小柄な選手はしばしばふっとばされてシュートチャンスがつかめない。結局ムリな形でシュートを打つ単調な攻めで、苦肉の反則も7MTを5本もとられる始末。どうしても厚いディフェンスを切りくずすまでには至らなかった。その失敗がグンメルスバッハの逆襲をまともにあびてしまった。しかし、全同大飯田のタイミングのよいシュートで6点とあわせて恵まれた体格の持主チャンピオンシュミットの巨砲は予想にたがわず10点をたたきこみ、最後まで攻守に力をゆるめなかったグンメルスバッハのプレーに観衆は納得した一戦だった。

大同、前半互角の善戦

ハマン、柳川の好守光る

観戦記 杉山 茂（NHK運動部）

第3戦・大同製鋼(愛知)との試合は4月10日午後3時30分から名古屋の愛知県体育館で行われた。審判=稲石三二、藤田信義。観衆約四千。

○……全同大戦に大勝してようやく自分のペースをとり戻したグンメルスバッハには余裕がのぞかれた。シュミットをベンチにおいてスタート。一方の大同は新しく中井(オリンピック候補・同大出)を加えて今シーズン各大会で最有力優勝候補という呼び声が高いチーム。その試合ぶりが注目された。

グンメルスバッハ 21（8−6、13−10）16 大同製鋼

得	【グンメルスバッハ】		【大同】	得
0	ハマン	GK	柳川	0
0	K・ブラント	FP	戸谷	1
2	リンゲルバッハ	FP	野田	7
5	ボルダー	FP	藤中	3
1	フェルドホフ	FP	加藤	2
1	ケラー	FP	西村	1
1	J・ブラント	FP	中井	1
3	ベステベ	FP	栃原	1
7	シュミット	FP	小沢	0
1	ライズテ	FP		
0	ブランシュバイク	FP		
21	（4）	7MT	（1）	16

○……先取点は40秒にあっさりベステベが決めた。左45度12m地点から一歩踏みこんでのシュート、GKの右肩口を鮮やかに突いた。ついで2分ボルダー、2分30秒リンゲルバッハが独走して3−0。

大同は小さくボールを廻すが長い手をいっぱいに拡げて守る相手ディフェンスをどうしても崩せない。藤中、中井らがミドルシュートを試したがはずれる。ディフェンス――GKの連けいが実にうまい。スキをみつけて射ったというより誘いこまれて放った感じだ。

○……6分、藤中のジャンプパスを受けた中井がためらわずサイドの野田へ好パス、野田が十八番の倒れこみでやっと1点をあげた。

この得点で大同は固さがほぐれ積極的に攻めこみ反撃に移ったがグンメルスバッハも18分シュミットを登場させた。

試合の主導権はグンメルスバッハが放さなかったが、大同もシュミットをマークしたベテラン戸谷が23分巧みなインターセプトから持ちこみゲットする好プレーなどあって26分6−6と一歩もひかない。

しかしグンメルスバッハは前半終了まぎわシュミットが豪快なロングと7MTで2ゴールをあげて態勢を立てなおしリードは許さなかった。

○……後半も10分までは一進一退だったが次第にグンメルスバッハの地力が善戦する大同を圧し、特にシュミット、ボルダーの長身コンビが快投、ディフェンスがこの二人を防ごうと前へ出ようとするとフェルドホフを中心にローリングオフェンスを展開、柔軟な攻撃力で突きはなした。

それにしてもシュミットの豪快なシュート力は圧巻。後半16分の一投は左腕から投げこんだもの。

また、カーターの穴を埋めるハマンの堅実な守りとJ・ブラントの鋭い動きが印象的であった。

大同GK柳川のファイトにあふれたプレーもよかった。

日独戦 読者の声

【大阪】久しぶりの国際試合、それもヨーロッパナンバーワンといわれるチームの来日とあって大きな期待で会場へ足を運んだがグンメルスバッハのコンディションはあまりよいようでなく、時おり投げやりなプレーがみられたのは残念だった。（大阪・志田信一郎）

【大阪】全日本は出だしはグンメルスバッハにリードされたが、すぐに追いつきあっという間に逆転して、強化の成果を示したのはみごとだった。相手は旅の疲れがあったようだが、いかに欧州一といってもクラブチームに全日本が負けては大変だと思っていただけにこの快勝は大変気持ちのよいものである。（大阪・武井和子）

【京都】シュミットの豪快なプレーに圧倒された。さすがに世界一といわれる選手だけあってその攻撃力はとても日本人にはマネできないと思った。（京都・清水一）

【名古屋】得点の割にグンメルスバッハの一方的な試合だった。大同も積極的に攻めていたが身長差はどうすることもできなかったようである。ハンドボールもこうなると体格・体力の差が勝負の分かれ目のような気がし、いささか日本の将来に悲観を抱かざるを得なかった。（名古屋・下田隆則）

【草薙】勝負は一方的で盛りあが

激しい清商クの斗志かわす

第4戦・清商ク（静岡）との試合は4月11日午後3時40分から静岡の県営草薙体育館で行われた。審判＝藤田信義、稲石三二。観衆約三千。

観戦記

杉山　茂（NHK運動部）

○……グンメルスバッハの欧州での評判は「強くて荒っぽいチーム」ところが清商クは、その上を行く（?）荒さでこの大敵にぶつかった。

ディフェンスは詰めに詰め、さすがのシュミットらも、この執ようなマークとボディチェックにはてこずったようだ。

清商クに得点力があればたしかにこの策戦は面白かったと思う。グンメルスバッハが焦っていつになく正確さを欠いたシュートを乱発していた間に反撃のチャンスを再三つかんだのだが、肝心の攻撃が相手ディフェンスの固い守りをどうしても突破できず、そのうえパスミスを演じて逸機したのは拙い。

○……清商クのはげしい当りをもてあましながらもグンメルスバッハは12分には4－0。清商クは13分久保田がいかにもベテランらしく、わずかなスキをみつけたアンダーシュートで1点を返したが、グンメルスバッハはすぐに連続3ゴール。特に19分の1点はGKからフェルドホフを中継してライズテに渡った絵に画いたような鮮やかな速攻であった。

○……攻撃的なチームといわれるグンメルスバッハだが、守りも強い。ボルター（194cm）、シュミット（196）、ライズテ（186）が中央部を固めいっぱいに手を拡げて守ると、日本チームはとても攻め切れない。

シュミットが半身になってエモノを狙うような構えを見せ守備面でもチームの中心となっていることは注目してよいものがある。

フェルドホフの巧みなボディチェックも見習うべきだろう。サイドからのシューターに対して身体を密着させながら押し出すプレーは彼独得のもののようで、しかもGKとの連けいが完ぺきだからいっそう威力がある。

○……後半開始直後は清商クの〝舞台〟だった。佐藤（中央大）がシャープなフットワークで連続ゴールしたあと、渡辺（与）の速攻、佐藤のミドルシュート……。一気に7－14まで詰め寄ったのだが、グンメルスバッハは10分フェルドホフとベステベのみごとなコンビネーションプレーを口火に再び矢次ばやの攻撃をたたみかけ一方的な経過とした。

○……もとより実力差れきぜんだけに、勝負としての興味はうすいものがあったが、衰退気味のクラブ界にあって多彩な活動をつづける清商クが敢然とこの国際試合にうって出た姿勢は好ましいものがあろう。

片瀬監督は「恥ずかしくないプレーをやれば充分ですよ」といっていたが最後まで粘りぬいた試合ぶりは賞されてよかろう。

10年前に対戦　グンメルスバッハと日本チームの対戦は今回が初めてではなかった。

昭和36年3月7日グンメルスバッハ町で第4回世界男子7人制に出場した全日本が28－27で勝っている。

グンメルスバッハ 23（13－3、10－7）10 清商ク

得	【グンメルスバッハ】		【清商ク】	得
0	ハマン	GK	望月雄	0
		GK	大石尚	0
2	フェルドホフ	FP	久保田	1
2	ベステベ	FP	佐藤	5
12	シュミット	FP	渡辺正	0
1	ブランシュバイク	FP	浜田	0
1	ライズテ	FP	藤井	0
2	ケラー	FP	服部	1
2	ボルター	FP	鈴木	1
0	リンゲルバッハ	FP	渡辺与	1
0	K・ブラント	FP	三ッ井	1
1	J・ブラント	FP	望月秀	0
23	（4）	7MT	（0）	10

グンメルスバッハメンバー

団長	オイゲン・ハース				
	ヘルベルト・グロッデ				
	ロルフ・プロニア				
	グンター・ウロナ				
	ハイネル・ロエッセラー				
	ハインツ・パッセラー				
GK	※クラウス・カーター	(22)	186cm	75K	0
	ラルフ・ハマン	(21)	184	74	0
FP	ハンスゲルド・ボルター	(31)	194	88	18
	クラウス・ブラント	(29)	190	94	0
	※ハンス・シュミット	(28)	196	98	52
	※ヨヘン・フェルトホフ	(27)	182	84	17
	ライナー・リンゲルバッハ	(27)	181	85	5
	※ヨヘン・ブラント	(26)	189	86	3
	ゲルハルド・ライズテ	(25)	186	87	2
	ブルクハルト・ミュラー	(25)	182	82	1
	ヘルムート・ケラー	(22)	181	77	4
	※クラウス・ベステベ	(21)	187	89	13
	ウエ・ブラウンシュバイク	(21)	181	82	6

・※印は西ドイツナショナルプレイヤー
・右側の数字は日本での総得点数

りに欠けたが、清商クが最後まで試合を捨てなかったことと、西ドイツがしばしばダイナミックな攻撃を見せたのであっという間に60分がすぎた。特にシュミットとボルターがソフトボールのようにボールをつかんで投げおろすシュートとフェルドホフが猛烈なスピードで清商ディフェンスの間を走りぬけるプレーが印象的だった。

（静岡・小西正志）

【東京】大崎電気の健闘で、これまで僕の見たハンドボール試合で最高に面白いゲームだった。グンメルスバッハは平均身長が190センチ近いということだが、おそらく欧州各国はすべてこのぐらいの体格をしているだろう。日本が世界で活躍するにはスピードと細い正確なテクニック以外に活路はないのではなかろうか。（東京・T生）

【横浜】日体大はあまりにも小さかった――というのが僕の印象のすべてだ。小がらな日本はスピード戦法以外にない。後半、速攻を再三成功させたのだから、なおさら惜しい。それにしてもグンメルスバッハの荒いまでのダイナミックな攻守には驚ろかされた。このシリーズいちどもTV中継がなかったのは残念。（川崎・篠崎紀三男）

※……読者から日独戦に関する戦評などを多数いただきましたが、高校生からの投書を特集して掲載いたしました。（編集部）



全日本戦（毎日新聞社提供）



大崎電気戦（山田真市氏撮影）

大崎、後半の追撃も空し

力と技の好試合を展開

第5戦・大崎電気（埼玉）との試合は4月14日午後6時30分から東京体育館で行われた。審判＝嶋田新太郎、岡前義春。観衆約四千

グンメルスバッハ 17（11－6, 6－5）11 大崎電気

【大崎】		得
GK	下里	0
FP	西村	0
	近藤	5
	飯田	0
	東	3
	谷口	0
	佐藤	0
	林	3
7MT	(1)	11

【グンメルスバッハ】	得
ハマン	0
リンゲルバッハ	0
ボルター	0
フエルドホフ	7
シュミット	6
ベステベ	2
ライズテ	0
K・ブラント	0
J・ブラント	0
ブランシュバイク	2
ミヨラー	0
(1)	17

シュミット選手訪問

いわばシーズン・オフ、それに突然の来日で前宣伝も充分でなかったにもかかわらず各地の会場は八分どおり観客席が埋った。誰もお目当てはエースのH・シュミット選手。グルイア（ルーマニア）と並ぶ世界の最高アタッカー。ヨーロッパでは彼がコートに姿を現しただけで観衆はワッと沸くほどだ。1m96、98K。ちなみに大相撲の幕内力士で最長身は高見山の191センチだ。その巨体を利して日本での6試合では52点を叩きだした。

東京の宿舎に彼を訪ねてのインタビューは、太い腕のそこかしこについた生キズをなめながらのものだった。

――だいぶケガをされているようですね。

シュミット　どの試合でもはげしく当たられるからね。もうなれていますヨ。

――その体格ではずい分食べるでしょう。

シュミット　そうでもない。肉なんかより卵の白味や糖分、果物などを沢山食べてるのです。

――趣味は

シュミット　女房と二才になる一人息子と家で団らんしているのがいちばん楽しい。これじゃ答えにならないなア(笑)。スポーツ写真を撮るのが好きです。

――日本の印象は

シュミット　日本の人は実に親切だし、由緒ある町や都会を見物してきて大変ラッキーに思ってます。

――日本のファンはどうですか

シュミット　技術的にみてあまりよいプレーではない時もあったのですが、そうした場合でも得点をすると拍手が送られるのはヨーロッパではないことです。

――日本の体育館は

シュミット　申し分ないと思います。各地に大きな体育館があるのには驚ろかされました。

――日本のプレイヤーで印象に残った選手は

シュミット　どの選手もスピードがあり軽妙な技をもっています。二〜三人印象的な選手がいましたが名前は判りません。日本人の名前は難しすぎますよ（笑）

――あなたは何才でハンドボールを始めたのですか

シュミット　11才。

――ハンドボールの生活でこれまでもっとも思い出深いのは？

シュミット　世界選手権への出場ヨーロッパカップ2連勝など数限りありませんが、今回の日本遠征も私の心に深く刻まれるでしょう

――日本のハンドボール界にアドバイス(技術的)をお願いします

シュミット　体格のハンデをスピードでカバーしていることは賢明です。ジャンプ力をつけ腕の筋力をアップすればさらによいと思います。ロングシューターも養成しなければいけないでしょう。

サイドマンに左利きの選手がいないのも損なことではありませんか。

――西ドイツは来年のミュンヘンオリンピックでメダルをとれませんか。

シュミット　とりたいものです。しかしビッグエベントには突拍子もないことがつきものです。思わぬチームが大活躍をすることはハンドボールに限らずこれまでにいくつもの例があります。

――アマチュア資格を問いただされ西ドイツナショナルチームからはずれたルブキング（注・シュミットと比肩された西ドイツの元エース）の問題をどう思いますか

シュミット　もはやそれは過去の問題です。彼と一緒にプレーできなくなったことは私個人としては大変残念です。彼が自分の生活を考えてとった行動ですのでとやかくはいえません。

☆

上級小学校で〝社会全般〟という課目の教師をしているという彼はコート上のたくましいプレーを想像できぬ物静かな態度でていねいに質問に応えてくれた。

観戦記

（朝日新聞運動部）渡辺　邦雄

「日本のミュンヘン五輪六位入賞ですって？　とても無理でしょうね。十位以内もむずかしいのではないかな」——試合前のグロッデ第二会長の話。あまりにも率直な返答に、むしろこっちが戸惑った。が、試合後にハース第一会長、ベステベ、ブランド弟両選手に聞いてもやっぱり同じような答えだった。

さて試合開始。まず4分と6分すぎにグ軍の左腕フェルドホフがジャンプ一番のシュートを決めた。一八二センチ、八四キロ。巨砲シュミットの一九六センチ、九八キロと比べれば〝小型ダンプ〟級だが、動きの鋭いこと。フェルドホフは24分には8—6と大崎を引離す〝床〟をはうようなアンダー・シュートも見せ、彼を中心とした目まぐるしいローリング・パスも披露した。「日常の練習は週二日、一回につき約一時間半」と日本では考えられないほど少ないが、数多い国際舞台の実戦を通じて身につけた「たくましさ」と「動物的なカン」が、そこにはあった。

グ軍2—0のあと、大崎は林、そして谷口—近藤の速攻をまじえて3—3、4—4と接戦。17分には近藤が右45度から変めて6—5とこの試合唯一のリードを奪った。

ベステベ選手ではないが「スピード（速攻）こそ日本の活路」を地でいった大崎の試合展開。でもそのあとは奮起したグ軍が、シュミットの「二階から投げ下ろす」ような鋭角度の豪快なシュート、大崎を上回る速攻などであっさり引離してしまった。グ軍がしく1・5防御の厚いカベ。それから数メートルも離れて回す大崎のパスは「ムダで、得点差を考えないプレー」とグ軍の批判をかった。

総合的な体力、スタミナ、力強さ——今更ながら日本選手の劣勢をいやというほど見せつけられた試合でもあった。悲観論は禁物だろうが、試合前後の彼らの言葉はやっぱりホントなのかもしれない。

グンメルスバッハ最終戦にも快勝

消極すぎた日体大戦法

第6戦（最終戦）・日体大（東京）との試合は4月16日午後7時5分から横浜・・体育館で行われた。審判＝安藤純光、佐野和夫。観衆

グンメルスバッハ

☆……………………☆

クローズアップ

▽……大チームである。各国のチャンピオンチームを集めたヨーロッパカップで2連勝。3度優勝しているのはグンメルスバッハだけだ。「世界最強」という看板に偽りはない。

今度の遠征は、ヨーロッパカップ2連勝のいわばご褒美。日本のあとはバンコク観光という予定だ。遠征費用は「入場料収入の純益から捻出した」（オイゲン・ハース団長の話）という。一九六五年以後このチームはソビエト、スペイン、アメリカ、カナダなど18カ国に遠征しており、日本は19番目の訪問国。

▽……ヨーロッパでこのチームの人気はたいしたもの。今回も熱狂的なファン7人がチームと一緒に来日したほどで4月2日ドルトムントで行われたステアウア・ブカレスト（ルーマニア）とのヨーロッパカップ決勝は一万三千という大観衆が集った。入場券は4日前にすべて売り切れ。

特別席20マルク（邦貨約二千円）立見席でも8マルク（八百円）。ホームゲームでは総収入の30パーセントをグンメルスバッハが受けとる仕組みだから極東への観光旅行もつねに大観衆を動員していることのクラブの台所にはあまり響かない。

▽……グンメルスバッハのスポーツクラブにはハンドボールのほか9種目があり会員の総数は千八百人。このうち五百人がハンドボールに親しんでいる。

年令、技術などによっていくつものクラスに分かれ、最高レベルのおよそ20人がレギュラーとして西ドイツの全国リーグ（ブンデスリガ）に出る。現在、カーター、シュミット、フェルドホフ、J・ブラント、ベステベ、コスメール（世界学生選手権に出場のため来日せず）と6人のナショナルプレイヤーをかかえており、もちろんこれは西ドイツ最高である。

▽……クラブ員の職業はマチマチ。来日メンバーをみてもカーターは機械工場の技師だし、J・ブラントは財務事務官、シュミット、K・ブラントらは教師、ライステ、ブランシュバイクらは学生といった具合だ。

一日の練習時間が基礎練習60分ゲーム30～60分と短いのもそれぞれのつとめを終えてから三々五々クラブハウスへ集るからだろう。

▽……今回の遠征は社会人はそれぞれ年次休暇をとってのもの。ナショナルプレイヤーがナショナルチームで出かける場合は西ドイツ連盟の手続きによって〝公休〟扱いされる。しかも、ある程度の休業補償が支給されるようだ。それどころか時にはプラスアルファもあるらしい。滞独中の近森克彦氏（元全日本選手）によると、昨年12月の国際大会で西ドイツがユーゴを破った時、西ドイツ協会は試合後各選手に100マルク（約1万円）を手渡したという。

▽……ヨーロッパカップ2連勝に対する特別ボーナスが極東旅行—日本ではちょっと考えられぬことだが、これが世界のトップ・アマの現在の姿なのかも知れない。

日本の関係者が「ミュンヘン・の試金石」「世界屈指の強豪に善戦」と必死の形相をしているのと対照的に彼らはゆっくり〝日本の春〟を満喫した。

休日のあいまのオープン戦でしかも5勝1敗。「たいへん楽しかった。また来たいよ」とすこぶる御気嫌で帰途についたのもムリない話であろう——。（S）

約二千六百。

グンメルスバッハ 24（16—8、8—4）12 日体大

得	【グンメルスバッハ】		【日体】	得
0	ハマン	GK	高橋誠	0
		GK	大村	0
0	K・ブラント	FP	氷海	0
6	ボルター	FP	松原	4
2	フェルドホフ	FP	高橋精	2
0	ケラー	FP	佐藤雄	2
1	ベステベ	FP	池本	0
13	シュミット	FP	岩下	3
0	ライ・ステ	FP	細木	1
1	ブラウンシュバイク	FP	佐藤富	0
1	ショーラー	FP	松岡	0
		FP	小林	0
24	（2）	7MT	（1）	12

▽交代　日体GK野村　FP浅原　藤田、細江（いずれも得0）

観戦記

（日本協会常務理事）藤本　強

速攻を誇る日体大、グンメルスバッハがこれまでの五戦を闘ってきた相手とはガラリと変った相手だ。ある意味から云えば、もっとも日本らしいチームと云えよう。

横浜市のこった演出で幕あけしたこの試合の見どころは、日体がいかに速攻を出すかというであった。

スタートは日体大のスカイプレーが3分に決ったがその後はミスが多く、それをシュミットを中心にして、外からの攻撃でグンメルスバッハは得点を重ねる。日体大はいかにも小さい。懸命にキタナイまでに当ろうとするが、肩までもない選手が多いのでは、シュミット、ベルターの両巨砲のシュートはディフェンス陣のはるか頭の上を通過する。これではキーパーはどうしようもない。反則を重ねてはフリースローから、あるいはロングがビシビシ決る。日体大の攻撃は長身揃いのグンメルスバッハのディフェンスをもてあまし、外でいたずらにボールを廻すだけ、時たま決ることは決まるが、偶然決まったようなシュートが多い。ディフェンスが固らないことには速攻はでない、日体大が善戦するためには、とりつとられつにしないことにはどうしようもないのだが、バックを動かすような動きもない。前半はこのようなペースで経過し8—4。

後半の日体の反撃が期待されたが40分までは全くグンメルスバッハへのペース。この間の10分間にシュミットの4点をはじめとして、8点を連取され、16—4と絶望的な差がついてしまった。

日体大らしい動きが見られたのは45分から55分までの間の10分間この間日体大はまず左サイドでの二段連続の切りこみが成功し、岩下が決めたのを皮切りに、二段速攻から松原が決め、ついで岩下佐藤、松原と決め、やっと会場を湧かせた。

鋭い連続的な切りこみと、氷海の好配球もあり、日体大らしい攻めを見せた。これでややすくわれた感があったが、もしこれがなければ、全くみじめな試合だった。

日体が速攻を出せなかったことが大敗につながった。

それにしても、後半開始直後に見せたグンメルスバッハの攻撃はさすがと思わせるものがあった。

グンメルスバッハ2連勝　ヨーロッパカップ

来日したグンメルスバッハは4月2日ドルトムント（西ドイツ）で行われた第12回男子ヨーロッパカップ・トーナメントの決勝戦でルーマニアの強豪ステアウア・ブカレストと史上まれにみる大激戦を演じた末17—16で勝ち2年連続3度目の優勝を飾った。

シュミット対グルイアというキャッチフレーズ、両雄の激突はヨーロッパカップ決勝では初めてのことで一万三千の入場券は売り出しと同時になくなるほどの人気。当日のウェストファーレン・ホールは異常なまでの熱気がみなぎった。

試合は万余のファンの期待に応える壮烈な激戦だった。

グンメルスバッハ 17（10—10、7—6）16 ステアウア・ブカレスト

得	【グンメルスバッハ】		【ブカレスト】	得
0	※カーター	GK	※ディンカ	0
0	ハマン	GK	ムントアヌ	0
0	K・ブラント	FP	※グルイア	6
9	※シュミット	FP	※ガッツ	2
2	※フェルドホフ	FP	※ゴラン	0
1	※ウエステベ	FP	※ポペスク	0
1	※コスメール	FP	※マリネスク	0
0	※J・ブラント	FP	※ヤコブ	0
3	ボルター	FP	※コアサ	1
1	リンゲルバッハ	FP	※バートロム	4
0	ケラー	FP	ストックル	1
0	ブランシュウイグ	FP	クリスチャン	2
17	（2）	7MT	（5）	16

※印はナショナルプレイヤー

2—2、3—3、4—4と互角の戦況からグンメルスバッハは前半終了まぎわシュミットが貴重なリード点をあげた。

後半2分、ステアウアもいったんは7—7と追いついたが、グンメルスバッハには余裕があった。5分8—7と再び優位に立ったあと一気に3点を連取、そのままのペースで22分16—13とし、しかもステアウアはバートロムが反則退場、勝負あったかにみえた。

しかし、ステアウアは最後まで粘り26分15—17、28分16—17と追いこみ、場内の興奮はいやがうえにも高まった。残り10秒、ステアウアボールとなったが、グンメルスバッハは必死に防ぎ、大苦闘の末、ヨーロッパカップの保持に成功した。

グンメルスバッハ戦

運営面の問題点

▽……準備期間が短かかった割には各会場ともソツなく運営された。すでに国際試合やビッグゲーム開催の経験が豊富な6都市であったからだろう。

観客動員（延二万人）もまずまずでむしろ43年秋の西ドイツ選抜戦よりもよかったという声さえある。グンメルスバッハの名が比較的知られていたこと、それにシュミットという大スターの存在がなによりも大きい。

▽……注目されるのは第1戦（大阪・対全日本）と第5戦（東京・対大崎）で一般ファンの入場が多かったことである。高校生、学生の動員だけをたよりにする時代は去った。いかにして背広のファンをつかまえるかが今後の課題。

幸にも第1戦は全日本が快勝、第5戦は互いの持ち味を活かして今シリーズ最高の内容となりつめかけた観客をたん能させた。

▽……少年ファンも増えているようだ。年少層対策に力を入れている名古屋がはっきりとその〝実績〟を示した。試合が終ってから選手たちを取り囲んでサインをせがむ風景も珍しくなくなった。

考えなければいけないのは、集ったファンをもう少し大事にしなければ？ということである。

試合前のメンバー紹介にしてもあまりにもおざなりだし、場内のムードを高めさせるような誘いがまったくといってよいほど考えられていない。得点のたびにゲッターの名をアナウンスしていたのは静岡会場だけである。

▽……〝楽しませる〟という点では横浜の演出がとびぬけていた。前座試合が終ると場内のライトが消え、ゴール後のステージの幕があいてブラスバンドの軽快な演奏、そして入場式。ハーフタイムにもブラスバンドが鮮やかなパレードを見せてあきさせなかった。

名古屋ではハーフタイムを御自慢の小学生紅白試合で埋めたが、有料試合の時にはなんとかこの10分間を活かす工夫をこらして欲しい。

▽……TV中継が第3戦（対大同製鋼＝名古屋テレビ）だけ、それも東海エリアに限られていたのは惜しい。日本協会は『来日決定が遅かったためTV各局と折しようするだけの時間がなかった』と弁明しているが全国の関係者にとっては物足りぬ話である。

マスコミ対策は理事会などでも常に問題となっているが、報道関係者側からの不満や注文がいぜん初歩的なものであることを反省しなければなるまい。

体力といっそうのスピードを
ハーアス団長語る

グンメルスバッハのオイゲン・ハーアス団長（同クラブ会長）は最終戦のあと日本チームの印象を次のように語った。

『私が10年前日本チームを初めて見た時よりも、日本選手は体格もよくなったし、プレーも格段の進歩をしている。

しかし、日本がオリンピックや世界選手権で上位入賞を狙うためにはもっと大きな選手を集める必要があるし、60分間おとろえることのないスピードを養うべきだろう。』

これまでの日独親善試合（男子）

※印ナショナルマッチ

▽第1回（昭13.9）
日体　19—6　ヒットラーユーゲント

▽第2回（昭15.6）
①日　体　8—5　在日ドイツ選抜
②日　体　8—5　在日ドイツ選抜

▽第3回（昭17.11）
全日本学生　8—7　訪日ドイツ艦隊選抜

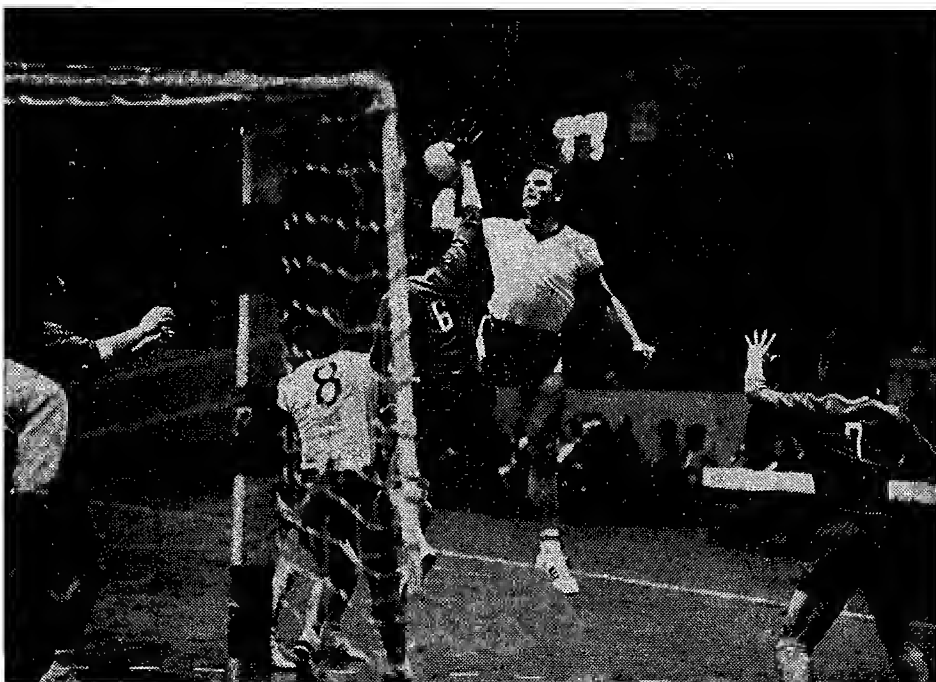
▽第4回（昭18.12＝枢軸国交歓大会）
全日本　11—11　在日ドイツ選抜

▷第5回（昭31.9）
①西ドイツ　19—8　全日本学生
②西ドイツ　24—13　全東海
③西ドイツ　21—9　富山ク
④西ドイツ※27—16　全日本
⑤西ドイツ　22—6　全九州
⑥西ドイツ　14—5　全山口
⑦西ドイツ　18—10　関東学生連合
⑧西ドイツ※28—12　全日本
～以上いずれも11人制～

▽第6回（昭40.3）
全東京　38—7　独艦ドイツチエランド号

▽第7回（昭42.9）
①全芝工大　26—19　西ドイツ選抜
②全立教　24—11　西ドイツ選抜
③西ドイツ選抜　23—21　東日本選抜
④西ドイツ選抜　33—16　全仙台
⑤西ドイツ選抜　18—15　大崎電気
⑥西ドイツ選抜　20—12　中央大
⑦西ドイツ選抜　17—7　全早稲田
⑧西ドイツ選抜　17—10　菊松会
⑨西ドイツ選抜　19—13　全京大
⑩西ドイツ選抜　14—10　大阪イーグルス
⑪西ドイツ選抜　19—11　全静岡
⑫西ドイツ選抜　24—16　桜友会
⑬全日本　23—13　西ドイツ選抜

▽第8回（昭46.4）
グンメルスバッハ来日（全6戦）



大崎電気戦（山田真市氏撮影）



日体大戦

"速攻を最大の武器に"
オリンピク強化方針決まる

オリンピック対策本部（全日本男子ナショナルチーム）は、このほど「46年度強化方針」をまとめ明きらかにした。これはあくまで11月14日から始まるオリンピックアジア予選を目指してのもので5次約73日にわたる強化合宿（本誌既報）はさらに具体的な課題によって進められることになる。

〔昭和46年度オリンピック対策強化方針〕

一、精神力の強化
集中力を高め勝利の執念に徹する。猛練習に耐え抜き厳しさを養う。

二、防御力の強化
体力・気力・"脳"力を生かしはげしく動いて力を強化する。

三、速攻を最大の武器とする
瞬発力、体力、判断力を最大限に生かし、速攻で勝負する。これを日本チームの特徴とする。

四、基礎と組織力の強化
ミスをなくし、忠実なプレーで組織力を強化する。

五、個人のレベルアップ
あらゆる能力を高めることに重点をおき、合宿を離れた時に適切な指導のため、各選手の所属チーム監督と連絡をとる。

全日本女子3回の強化合宿

日本協会では12月オランダで開かれる第四回世界女子選手権に出場する全日本女子第2次候補（GK2、FP12名）の強化合宿日程（3回）を次のように決めた。

▽46年度第一次　5月10日～25日　四日市市田村紡績
△第二次　7月25日～8月1日、熊本県阿蘇
△第三次　10月中旬、東京

山田監督らコーチングスタッフの計画では第三次合宿終了後はやければ11月中旬に日本を出発、欧州各地を転戦のあと世界選手権に出場することになっている。

時評

多くの期待をうけて田村―荒川体制が再スタートした。首脳陣もほとんど前期と同じ顔触れでオリンピック路線は全国の信頼をうけて一気に新年度も突っ走ろうとしているのはたのもしい。

ところで、すべてにガラス張りとなり健全運営も順調な斯界で一まつの不安とも、さびしさとも感じられるのは評議員会の低調である。

3月7日の定例全国評議員会（東京）の出席者はなんと5名にすぎない。しかも、このうち2名は代理出席だから全国で51名いる評議員で足を運んだのは徳永陸繁氏（高体連）、林達夫氏（愛知）、野原成之亮氏（大阪）の3氏だけだ。

オリンピックという重大事を前に、はたして最高機関、評議員会がこの状態でよいのだろうか。

評議員の資格は各都道府県協会々長と加盟団体の会長とされ、一昨年秋から田村会長の発案で日本協会役員以外の代理出席も認められるようになった。（日本協会規約第15条参照）

田村案の実現で最近の評議員会は活気があり、昨秋、盛岡での臨時全国評議員会には23名の出席者を得て協会執行部を喜ばせたものだ。それが、わずか半年後の会議ではいかに年度末、各氏が多忙とはいえ出席5、委任状23というのではこの先が思いやられる。

原因はいろいろと考えられるがやはり、評議員の資格を現行のままにしておけば、散発的には昨秋のようなことがあっても、多くは今春の状態を脱け切れまい。

そこで、評議員の正資格を「会長」に限定せず「各県一名」と巾を持たせたらと思う。

評議員の重みがなくなるという声もあろうが。5名の出席という現状よりははるかによかろう。

もちろん、各県、各団体が評議員というものの"位置"を考えて慎重な選出を行うという姿勢が大切だし、徳永、林、野原氏のような熱心な会長を抱くところは、現行を踏襲してひきつづき評議員をお願いすればよい。

日本協会OBといえるかたを「推せん」する手もある。

例えば、今春第一線から勇退された若崎重富氏や、一昨春やはり退かれた的場益雄氏などは斯界への情熱、豊富なキャリアなどまだまだ斯界に力を貸していただきたいところだろう。こうしたかたがたを推せん評議員としてスタッフに加えるのだ。

現時点ではひとわたり見わたしてもこの資格を有しておられると思うのは五指に満たぬが当座はそれでもよいだろう。

評議員会が、名実ともに斯界の最高決議機関となるためには評議員制度の抜本的な検討が必要なことを強調しておきたい。

アジア連盟(仮称)結成へ初の会合

懸案のアジアハンドボール連盟(仮称)設立を打ち合わせる初の公式会議が3月26日名古屋で開かれた。

オリンピックアジア予選問題(11頁参照)の協議に引きつづき行われたもので韓国の洪淳泰、朴煕聖、台湾の宋丙堂、イスラエルのヤコブ・ビランの各氏、日本側から田村会長、荒川理事長、久田田中、栗脇各常務理事が出席、設立まもないホンコン協会の高恵邦主席もオブザーバーとして同席した。

会議は規約の検討を主に進められた。日本、韓国両国から草案が提出されたため11月のアジア予選時に再招集することになり、それまでに日本―韓国、日本―台湾が個別折しようとして一応の意見調整を行うことも申し合わされた。

このほか、特に決定事項はなかったが日韓両案に大きな食いちがいがみられぬため、アジア連盟は早ければアジア予選前に結成の運びとなり、同予選中に役員決定にまでこぎつける可能性もでてきた。

韓国・台湾との技術交流

日本協会では、アジアハンドボール界のレベルアップと審判思想の統一について韓国・台湾協会筋と話しあいを進めていたが、このほど韓国協会から6月下旬に同国審判員を日本へ派遣したい旨の申し入れがあり、また台湾協会からも8月に技術委員を訪問させたいとの意向が寄せられ、予期以上に早く具体化することになった。

8月東京で日韓高校

恒例の日韓高校交歓スポーツ大会は8月22、24日東京(駒沢ほか)でハンドボールなど8競技が行われる予定。ハンドボールはこれまでどおり男子。

白花醸造をゲストチームに

全日本女子実業団選手権

全日本実連では3月7日横浜で開いた理事会で7月熊本で行われる第12回全日本女子実業団選手権に韓国の白花醸造をゲストチームとして招くことに決め、日本協会も了解した。

白花醸造は今年2月訪日し実業団・社会人と5試合を行い2勝2敗1分だった。日本の国内選手権に外国チームが参加するのは男女を通じて初めてのことであり成果が注目される。

田中実連理事長の話 国内女子の上位はチームが固定化しいささかマンネリズムだ。このムードを破るためにも白花醸造を招くのは意味があると思う。

ホンコン協会正式に発足

かねてから協会結成の準備を進めていたホンコン・アマチュアハンドボール協会(香港業余手球総会=HAHF)が今春1月16日正式に設立され、このほど日本協会に公式通知が送られてきた。

ホンコンのハンドボール界は台湾協会の指導で、昨年あたりから急速にその動きが活発となり予想以上にはやく組織の確立をみたわけである。

将来は国際ハンドボール連盟(IHF)への盟加手続きも行うことになっており、準備中のアジアハンドボール連盟(AHF)にも加入の意志を示し、3月26日名古屋で開かれたAHF結成準備会議には高恵邦氏が来日、出席している。ホンコン協会の主要役員は次のとおり。

▽会長 除 亭(大英帝国勲位官 ホンコンIOC委員)▽副会長 馬 文輝、呉 国泰、胡 法光▽執行委員・首席 高 恵邦▽副首席 呉 思険

梨花大(韓国学生女子)も来日

三年来の懸案となっている日韓女子学生対抗戦について、このほど韓国女子学生界ナンバーワンの梨花大が6月1日に来日することが内定した。

主力の平均一六四センチという大型チーム。

日韓学生の女子交流は初めてで当初は、男女の全日本学生選抜軍が訪韓する予定だった。(注・男子は全日本学生が7月に訪韓)

全日本学連では東京・大阪・名古屋などで4試合を準備している

ダンケルセン(西独1位)が今夏来日を希望

グンメルスバッハについで西ドイツチャンピオン「グリュン・ヴァイス・ダンケルセン」が来日を希望して来た。

このほど日本協会が明きらかにしたところによると、今シーズン西ドイツ選手権に初優勝した同クラブから7月中旬から約二週間滞在の予定で日本に遠征したい旨の連絡があり、往復旅費はダンケルセンが、日本での滞在費は日本側で負担して欲しいという条件も同時に示された。

日本協会では4月6日の常務理事会で検討した結果、地方協会の意向を聞いたうえ返電する。受け入れの場合は5~6試合を予定。

同クラブは7人制では今シーズンが初優勝だが、11人制では一九六七年から4連覇、六八年と七〇年には11人制ヨーロッパカップを握っている名門。

今シーズンの西ドイツ7人制全国リーグ(ブンデス・リーガ)では決勝トーナメントでギョッピンゲン(準決勝)グロスワルスタット(決勝)らをおしのけて優勝を飾り来シーズンはグンメルスバッハとともにヨーロッパカップに出場が決定している。

主力選手は、公式国際試合出場75回という西ドイツナショナルの主将B・ムンクをエースにウエン、クラマ、ドロッグメイヤーらが主力である。

昨シーズンまではドイツの至宝ルブキングを擁していたが、彼の転出で攻撃力はぐっと低下しているが、まとまりはむしろ出たという評がある。(西ドイツ選手権について本誌19頁参照)

全チーム「選抜軍」で
今年のNHK杯 男女ナショナルチームも参加

日本協会ではこのほど、6月25日から27日まで東京体育館で行う第18回NHK杯全日本選抜大会の出場チームをこれまでの単独チーム中心から全チーム選抜システムとすることに決めた。男女とも4チームのリーグ戦で優勝を争うが、来年度以降もこのシステムを採るかどうかは未定。なお、この大会は昨年まで12月に開かれていたもの。出場チームは次のとおり。

◆男子　全日本ナショナル（オリンピック第2次候補）、全日本実業団選抜、全日本学生選抜（韓国遠征候補）、全日本教職員選抜

◆女子　全日本ナショナル（世界選手権代表）、全日本学生選抜、東日本実業団選抜、西日本実業団選抜

審判・普及・技術委員決まる
ブロック、加盟団体選出

日本協会では新執行部発足にともなう各専門委員の推せんを急いでいるが、このほど三部門の各ブロック（沖縄を含む）各加盟団体選出委員計45名が次のように出揃った。任期は48年3月まで。

【審判部委員】　松田徳之助、由利弘、清水正、金原至、山田仁止、山田進、柳井文治、越智武、中西敬一、宮城勇〜以上ブロック選出〜、嶋田新太郎、中沢重夫、藤田八郎、近藤金博、福井正躬〜以上加盟団体選出〜

【普及部委員】　八重樫英治、森恭一、遠藤健次、加藤雅之、中根武彦、狩野幸介、高木敏行、川崎秀雄、荒木時弥、新垣健〜以上ブロック選出〜　三浦公、久保義雄、斎藤和夫、泉正明、森永吉彦〜以上加盟団体選出〜

【技術指導部委員】　吉沢正登、北村尚英、佐野和夫、徳前啓人、片瀬喜代次、小西博喜、辻一義、石原達夫、岡井幸由、大城光隆〜以上ブロック選出〜　望月伸三郎、江名英彦、高橋健夫、松岡富夫、八谷稔〜以上加盟団体選出〜

45年度優秀チーム決まる

日本協会では昭和45年度優秀チームとして男子は日体大（全日本選抜、全日本学生優勝）、女子は4冠王の大洋デパートを決めた。

なお、優秀選手（ベストセブン）は本誌既報のとおり45年度は選出しない。

男子は山口、女子は熊本で

全日本実連では3月7日横浜・平沼記念体育館で理事会を開き今年の選手権日程を次のように決め発表した。

▽昭和46年度全日本実業団男子トーナメント（6月13日〜16日・山口県下松市）

▽第12回全日本女子実業団選手権（7月7日〜11日・熊本市）

▽第12回全日本男子実業団選手権（7月21日〜25日・名古屋市）

男女の選手権を別の会場で行うのは第8回（昭43）につぎ2度目。

男子選手権に出場するチームは前回の上位6チーム（ワクナガ薬品、大同製鋼、大崎電気、三景、本田技研、宗形製作所）に6月のトーナメント上位2者が加り計8チームで争われる。

実業団ベストセブン決まる

全日本実連では3月の第11回全日本実業団選手権（既報）終了後ことしのベスト・セブンを次のとおり決め発表した。

◆男子▽GK　下里敏彦（大崎電気）▽FP　木野実（ワクナガ薬品）、藤中憲二、野田清（以上大同製鋼）、近藤信行、飯田誠行（以上大崎電気）、高梨豊（三景）

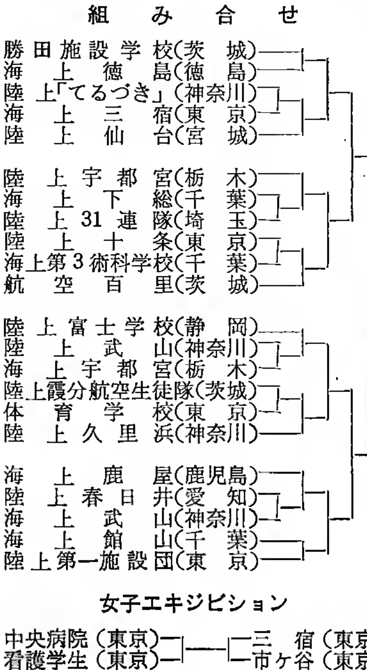
◆女子▽GK　小原名苗（大洋デパート）▽FP　垂水秀代　米恵美子、渡辺須和子、枝尾清女（以上大洋デパート）、木幡和子（大崎電気）、牧野涼子（東京重機）

5月15、16日に全日本自衛隊選手権

第3回全日本自衛隊選手権大会は5月15、16日の2日間東京、駒沢第一球技場に全国12都県22チームが参加して行われる。

優勝を争うとみられるのは第1シードの勝田施設学校（茨城）、海上鹿屋（鹿児島）、陸海2チームを送る宇都宮勢だろう。

初参加の女子は在京4チームによるエキジビション。



ソビエトが連続優勝
第4回世界学生選手権

第4回世界学生選手権は4月3日から11日までチェコのプラハ市などで開かれソビエトが前回（一九六八）につづいて優勝した。

この大会は3年に一度行われるもので今大会は16ケ国が参加、4ケ国づつ4組の予選リーグのあと各組上位2国（ベストエイト）が決勝トーナメントを争った。

その結果、決勝戦はソビエトー地元チェコとなり、ソビエトが昨年の世界選手権得点王・マキシモフをはじめマショリン、ズドレンコ、クリモフ、サユク、ルトチェンコらナショナルプレイヤーの活躍でチェコを降し2連勝した。

なお、決勝トーナメント以降は同点のあと延長を行わず両チーム6選手づつがそれぞれ7MT一回を試み、その決定数で勝負を決める方法が採られた。決勝トーナメント1回戦ソビエトーユーゴが15ー15のまま引き分け、注目のうちに"7MT合戦"が行われ、ソビエトが6ー4でユーゴに優り準決勝へ勝ち進んだ。

▽予選リーグA組
ポーランド 11ー11 ブルガリア
ソビエト 26ー21 西ドイツ
ソビエト 20ー15 ポーランド
西ドイツ 26ー15 ブルガリア
ソビエト 20ー6 ブルガリア
ポーランド 16ー11 西ドイツ

▽同B組
ユーゴ 23ー15 デンマーク
ルーマニア 25ー10 デンマーク
ユーゴ 25ー7 オーストリア
ルーマニア 19ー9 ユーゴ
デンマーク 19ー12 オーストリア
ルーマニア 21ー11 オーストリア

▽同C組
ベルギー 16（分）16 イスラエル
スウェーデン 21ー19 フランス
フランス 25ー10 イスラエル
スウェーデン 27ー9 ベルギー
フランス 27ー17 ベルギー
スウェーデン 20ー11 イスラエル

▽同D組
ノルウェー 28ー13 チュニジア
スペイン 23ー7 チュニジア
チェコ 26ー11 ノルウェー
チェコ 14ー10 スペイン
スペイン 10ー6 ノルウェー
チェコ 21ー12 チュニジア

初の"7MT合戦"

▽決勝トーナメント1回戦
チェコ 17ー15 フランス
ルーマニア 15ー12 ポーランド
スペイン ー スウェーデン
ソビエト 15（分）15 ユーゴ
※7MT ソビエト6ー4ユーゴ

▽同準決勝
チェコ 14ー13 ルーマニア
ソビエト ー スペイン

▽7位決定戦
スウェーデン 15ー12 フランス

▽5位決定戦
ユーゴ ー ポーランド

▽3位決定戦
ルーマニア ー スペイン

▽決勝
ソビエト 20（10ー6、10ー8）14 チェコ

歴代優勝国
▽第1回（昭38）スウェーデン
▽第2回（昭40）西ドイツ
▽第3回（昭43）ソビエト
▽第4回（昭46）ソビエト

西ドイツ便り・一宮昌平

西ドイツは全国リーグもすでに終わり、ヨーロッパカップ獲得のグンメルスバッハが日本遠征に出かけて留守、ハンドボール界の動きは小休止といったところです。

関係者やファンのもっぱらの関心は4月末に行われる世界女子選手権予選西ドイツ対スウェーデン戦にかけられているようです。

先日、スウェーデン、ナショナルチームのコーチと話しあう機会がありましたが、彼は女子世界選手権の優勝はおそらく東ドイツであろうということで以下チェコ、ルーマニア、ハンガリー、ソビエトとみていました。このうちソビエトとルーマニアは予選で顔が合ってしまい。チェコも東ドイツと予選を戦わなければならないのはすでに御承知でしよう。

さて、オリンピックのアジア予選も7ケ月後にせまりましたがヨーロッパの関係者は日本が韓国、イスラエルを降してミュンヘンへ登場してくることは間違いないと言っています。

韓国も強化に一生懸命のようで西ドイツから今年も9月頃にコーチが行くのではないかとも思われます。

グンメルスバッハが日本遠征の第1戦で全日本に敗れたことは当地の新聞にもいち早く報じられ、いささか驚きの目で見られています。各紙とも遠征疲れから敗れたのだろうとみておりますが、全日本が着実に力をつけていることを知り、嬉しく思っております。

（筆者は日体大OB、44年11月から西ドイツのケルン大学に留学、西ドイツナショナルチーム監督ペルナー・フイック氏の指導をうけている）

★☆★☆★☆★☆★

海外トピックス

――杉　山　　茂――

チェコ優勝

デンマーク国際トーナメント

デンマークのコペンハーゲン、アーハスにチェコ、デンマーク、ユーゴ、西ドイツの4ケ国を集めて、3月20・21の両日に行なわれた4ケ国トーナメントは、チェコが緒戦ユーゴに破れたが、以後の試合を巧みにのりきり、2勝1敗の成績で優勝をとげた。

デンマーク	20―16	西ドイツ	
ユーゴ	18―13	チェコ	
チェコ	23―19	デンマーク	
西ドイツ	13―12	ユーゴ	
デンマーク	17―17	ユーゴ	
チェコ	15―12	西ドイツ	

	チ	ユ	デ	ド	勝	分	負	得	失
西ドイツ	●	○	●	×	1	0	2	41	47
デンマーク	●	△	×	○	1	1	1	56	56
ユーゴ	○	×	△	●	1	1	1	47	43
チェコ	×	●	○	○	2	0	1	51	49

この試合を通して、西ドイツは不調。今シーズン、国際ゲームでは不振の西ドイツ、何とかこの今シーズン最後の試合で好成績を残しておきたかったのだが、また苦杯をなめてしまった。しかも苦手としていたユーゴに1点差で勝ち今シーズン2勝目をあげることはできたが、何といっても大きなショックはデンマークに4点差で破れたことである。

1959年以来、西ドイツはデンマークと10回の国際試合を行なっているが、一度も敗れたことはない。8回の勝利と2回の引き分と全くの敗け知らずであった。

ところが、13年振りにデンマークに負けるという事態を眼の前にして、西ドイツの関係者は大いに慌てた。

このような不振の時になると必ずでてくるのが、ルブキングを呼びもどせというファンの声。しかしながら、ドイツ協会はすっきりとルブキングの復活はあり得ないとしている。

ミュンヘンオリンピックのホスト国として、昨シーズンは世界選手権での不振を除けば（くじ運が悪かったとの声もあるが）、好成績を残している西ドイツチーム、悩みはつきないところであろう。

フランスもここの所不調で、果して、オリンピック出場が可能かどうかの瀬戸際まで追いこまれており、ここも強化策をめぐって、非難の声があがっている。

このようにヨーロッパ諸国では オリンピックを目指して、好調なチームはそれを持続し、不振のチームは何とか立ち直ろうと懸命の努力が続けられている。

S・キエフが2連勝飾る

～女子ヨーロッパ杯～

第11回女子ヨーロッパ・カップは3月に準決勝、4月5日に決勝戦を行った。

ベスト・フォアの激突では、前回優勝のスパルタク・キエフ（ソビエト）が、好調のFC・ニュルンベルグ（西独）の健斗にあい第2戦を落としたが、第1戦の大量リードを守って決勝へ進出、また世界選手権国ハンガリーの代表フェレンクバロス・ブダペスト対HG・コペンハーゲン（デンマーク）はフェレンクバロスが快勝した。

決勝戦（1試合）は4月5日ブダペストで行われスパルタク・キエフが前半リード、フェレンクバロスも地元の声援をうけて猛反撃したがキエフが逃げ切った。同チームは2連勝、ソビエト代表の優勝は4回連続6度目のこと。

▽準決勝第1戦

フェレンクバロス（ハンガリー）	14―7	HG・コペンハーゲン（デンマーク）
・スパルタク・キエフ（ソ連）	16―5	FC・ニュルンベルグ（西独）

▽同第2戦

フェレンクバロス	―	HG・コペンハーゲン
FC・ニュルンベルグ	10―5	スパルタ・キエフ

▽決勝

スパルタク・キエフ	11（7―4 4―5）9	フェレンクバロス

ルーマニア低調の北欧遠征

世界チャンピオン・ルーマニアは2月初めから北欧遠征に出て4ケ国と各2試合を行ったが、結果は4勝2敗2分と辛うじて勝ちこしたものの ランク外のノルウェーアイスランドに苦戦するなど低調だった。

このシリーズで今秋来日が決定しているスウェーデンが2連勝したのは注目されよう。

スウェーデン	15―9	ルーマニア
スウェーデン	13―11	ルーマニア
ルーマニア	12―8	ノルウェー
ルーマニア	10―9	ノルウェー
ルーマニア	15（分）15	デンマーク
ルーマニア	19―18	デンマーク
ルーマニア	21―18	アイスランド
ルーマニア	14（分）14	アイスランド

ルーマニア新人軍で優勝

～第4回ラテン・カップ～

ラテン系諸国による恒例の第4

回ラテンカップは4月3日からカサブランカに5ケ国が参加して行われた。各国とも次代をになう新人中心のナショナルチームに送りこんだが、ルーマニアが層の厚さをみせて4戦全勝で首位となり連勝した。

当初、出場を予定されていたブラジルとイタリアは姿をみせなかった。

フランス 12(分)12 ポルトガル
スペイン 11—9 モロッコ
ルーマニア — ポルトガル
ポルトガル 7—5 スペイン
ルーマニア 10—2 モロッコ
フランス 13—8 モロッコ
ルーマニア 11—7 スペイン
フランス 11—9 スペイン
ポルトガル 16—12 モロッコ
ルーマニア 11—6 フランス

【順位】①ルーマニア②フランス③ポルトガル④スペイン⑤モロッコ

アメリカ振るわず ヨーロッパ遠征中のアメリカはルクセンブルグの記念大会(既報)に出場のあと各地を転戦しているが、ルクセンブルグに15—20、スウェーデンBに15—21、ノルウェーに10—29で敗れるなどよい成績は記録していない。

スイスが善戦 スイスが西ドイツとの2連戦に健斗し注目をあびている。西ドイツはエース・シュミット(グンメルスバッハ)が欠けていたが、それにしてもノツター、ギガスらを中心としたスイスの躍進は目ざましいものがある。

西ドイツ 19—13 スイス
西ドイツ 19—15 スイス

ステラ決勝へ 昭和39年来日し、日本にもファンの多いフランスの名門、ステラスポーツが今年もフランス選手権の決勝へ進出した。

男子のフランス選手権は昨秋からのベスト・エイト2組(計16クラブ)によるリーグ戦を終了、各組上位2者の決勝トーナメントではステラがCSL・デイジョンを、US・イブリイがパリ・UCをそれぞれ破って4月24日の決勝へ進んだ。

ステラが勝てば3年ぶり、イブリイが勝てば2年連続の優勝。

西ドイツはダンケルセン 番狂せが連続した今年の西ドイツ選手権(ブンデス・リガ)は結局グリュンヴァイス・ダンケルセンとグロスワルスタットの決勝となり一万二千の大観衆の前で大激戦を演じた末、14—10でダンケルセンが快勝、新チャンピオンとなった。

ダンケルセンの主力はウエン、クラマー、ドロッグメイヤー、ムンク、ソルクらで今夏日本遠征の噂もある。

北リーグでは、今回来日のVfL・グンメルスバッハが終始快調にとばしていたが、最終期に至りまずTHW・キールに破れ、ついで、最終戦のGW・ダンケルセンに破れてしまった。

この時期、グンメルスバッハでは内輪もめが続き、グンメルスバッハをここまでに育て親とも言うべき、ドライシャンクトレーナーがチームをやめるなどのゴタゴタがあり、丁度この時期に連敗してしまい、北リーグではなんとか二位になり、ドイツ選手権出場資格(南北両リーグ一・二位チームによって争われる)を得たものの、準決勝でTV・グロスワルスタットの前に破れ去ってしまった。

ダンケルセンが至宝ルブキングの転出した年に、どうしても勝つことのできなかった7人制のドイツ選手権を獲得したというのは、何とも皮肉な話である。

近森選手の欧州球信④

3月23日と25日の両日女子のハンガリーと西ドイツの試合が西ドイツで行なわれています。この両試合いずれもハンガリーが連勝しました。地元でありながら、ハンガリーに連敗したことは、西ドイツの関係者に大きなショックを与えているようです。

ハンガリー 12—8 西ドイツ
ハンガリー 11—10 西ドイツ

西ドイツの女子のコーチは、42年に来日したハンブルグチームの監督トルカ氏がつとめていますが、オランダの世界選手権を目前にして、地元で連敗したことは、トルカ氏にとっても大きなショックであったらしく、この試合も一挙に不振を挽回すべく、それまでコペンハーゲンにいた、氏の秘蔵子の一人、ジーグフリト・ミヨラー(42年に来日、そのチャンスメーカーぶりで日本のファンにもおなじみ)を呼びもどし、ナショナルチームの一員に加えての一戦だけにそのショックは余りに大きかったようです。

グンメルスバッハはその姿を日本に見せている頃だろうと思いますが、4月2日のヨーロッパカップの総収入は二千七百万円とのことです。今更ながら、その人気のすばらしさに驚いているところです。

グンメルスバッハはオランダのナショナルチームと試合をし、29—14という大差でこれを破っています。グンメルスバッハの力というのも、先年の世界選手権予選でドイツナショナルがようやく破った相手だけに恐るべき強さです。

ハンドボールナショナルチームに関する研究　第三報
昭和30年〜昭和44年に至るハンドボール日本代表選手の体力の推移

東京大学　広田公一
日本体育大学　北川勇喜
東京大学　渡辺慶寿
星薬科大学　竹内正雄

目的

スポーツにおいて優れた成果をあげるためには、技術、精神力のほかに体力の要素も重要な条件の一つである。

われわれは、現在ハンドボールナショナルチームメンバーの体力測定を昭和44年1月と同年11月の2回に亘り測定したが、この機会にハンドボールの日本の代表チーム選手の体力について、過去の測定成績を整理して体力の変遷をみることも、今後のチーム発展のためにおおいに参考になること考えここに昭和30年〜昭和44年の全日本ハンドボール選手の体力についてその推移をみた。なお過去日本で対戦した。外国選手（西ドイツルーマニア）との比較検討をもおこなってみた。

結果及び考察

1 ナショナルチームの体力の推移

昭和30年〜昭和44年に亘る測定の結果を第1表に示す。但し、昭和35年は全日本チームが結成されなかったので当時外国チーム（ルーマニア）と対戦した全日体大チームの測定値を用いた。

第1表　体力の推移

項目＼測定年度	昭30	昭35	昭40	昭44
身長 cm	169.1	168.7	170.7	178.7 (5.7)
体重 kg	64.1	63.8	65.6	72.2 (5.0)
胸囲 cm	89.7	90.8	90.5	94.4 (3.1)
ローレル指数	133.0	133.0	131.7	126.4 (7.8)
肺活量 ml	4126.0	4580.0	4529.0	5014.9 (357)
比肺活量 %	101.0	111.0	111.0	114.5 (12.7)
握力 kg 右	49.9	52.4	52.5	56.5 (6.3)
握力 kg 左	50.1	44.8	46.8	51.6 (6.7)
背筋力 kg	143.6	133.9	129.3	175.0 (18.5)
垂直跳 cm	—	55.1	55.2	57.7 (5.6)
体前屈 cm	—	13.5	13.1	12.6 (12.9)

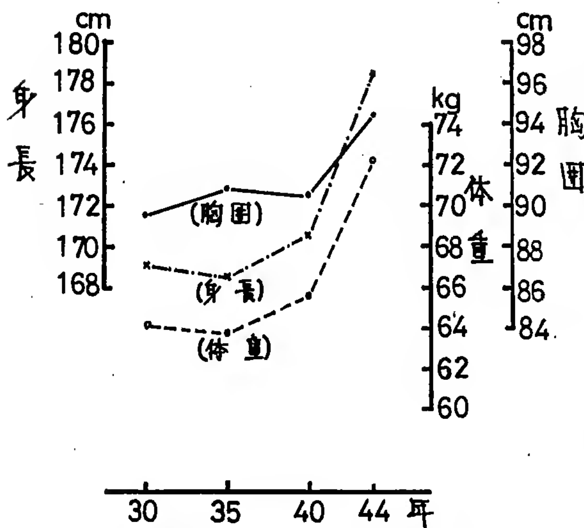
(S.D)

形態

形態は（第1表第1図）身長、体重、胸囲、ローレル指数を比較した。身長については、昭和30年の169.1cmであり、昭和35年168.7cm昭和40年170.7cmと昭和30年から昭和40年の間は殆んど変化がみられなかったが、今回測定した結果では、178.7cmと実に9cmの伸びを示している。参考として東京大学一般学生の身長を付記してあるが、これによると昭和30年167.0cm、昭和35年167.0cmと変らず昭和44年に169.3cmとやや伸びがみられている。これをハンドボール選手の値と対比してみると、昭和30年、昭和35年、昭和40年とでは身長の上では東大生と余り差のない者が、ハンドボールの全日本の代表的選手であったことがわかる。それが昭和44年のハンドボールナショナルチームになると、身長178.7cmにもなり、東大生の身長と比較してハンドボール選手は身長において著しく優っていることがわかる。つまり単なる一般的な体位の向上の結果ではなく、ハンドボールの普及によりハンドボール選手の層が厚くなったことによるものであろうし、また一面、各種目団体にみられるのと同じ傾向、つまり外国選手と対戦するための意図的な大型化にもよるのであろう。

体重についても、昭和30年64.1kg昭和35年63.8kg、昭和40年65.6kgとあまり変化がないが、昭和44年では身長と同様の傾向がみられ72.2kgと大きく、変化している。

胸囲については、昭和30年89.7cm、昭和35年90.8cm、昭和40年90.5cmと変りがないが、これも身長体重と同じ伸びがみられ、昭和44年には94.4cmと大きくなっている。これ等の結果は前述のごとく昭和44年に急な大型化の結果であると考える。



第1図　年度別平均値の推移（形態）

ローレル指数は肥満度あるいはからだの密度をあらわすものということができる。そして一般にローレル指数は身体の充実度を示すものとし身体充実指数ともいわれている。ローレル指数は体重に対する身長の3乗の比である、

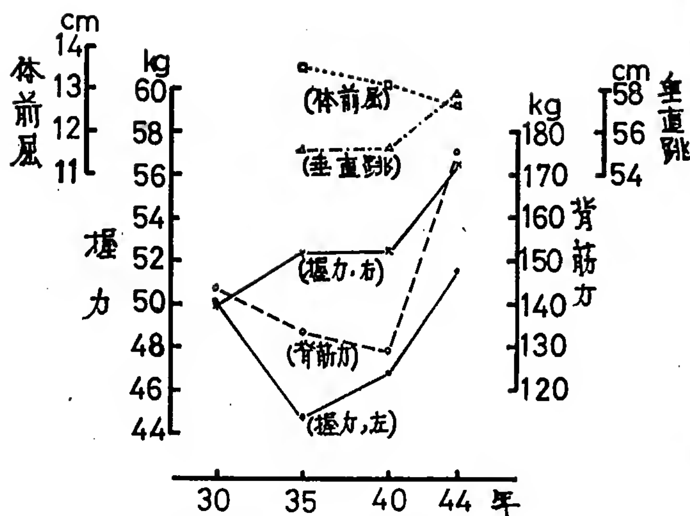
$$\frac{\text{体重(g)}}{\text{身長}^3\text{(cm)}}\times 10^4$$

ローレル指数は、一般学生でみると120前後であるが、運動選手では筋肉の量が多いことをはじめとする身体の充実化からローレル指数値は、例えば陸上100m選手では131〜144（東京オリンピック候補選手）[5] バレーボール125.6（東京オリンピック候補選手）[6] と高いのが普通である。これをハンドボール選手についてみると、昭和30年133.0、昭和35年133.0、昭和40年131.7、昭和44年には、126.4となっている。昭和30年、35年、40年の3年度は余り差がないが、昭和44年度には著しい低下がみられる。この低下、すなわち、体重

も著しく増加しているが、身長の伸び程ではない。つまり体型の細長化傾向があらわれている。こうした現象のハンドボール選手の体型の理想化現象であるかどうかは大いに問題となるところであろう。

機能筋力（第2図）

23才の建常男子の背筋力、握力は昭和44年3月の文部省資料[2]によると背筋力は、147.4kg、握力の左右の和は92.2kgである。この値に基ずいて、ハンドボールナショナルチーム選手の背筋力をみると、昭和30年143.6kg、昭和35年133.9kg、昭和40年129.3kgであり、また握力については、左右の握力の和の値でみると、昭和30年100.0kg、昭和35年97.2kg、昭和40年99.3kgであり、この10年間における発育発達の促進を考慮にいれても、尚普通の男子並の背筋力、握力しかなかったことが首肯できる。これに対し昭和44年度の選手では、背筋力はかなり大きくなり、21名の平均値で175.0kgと高まっている。そしてこの傾向は体格の場合に一致している。背筋力は、脚筋力と共にジャンプ力の大きな因子である。バレーボール[8]（第2表）においては、脚力と共に背筋力の強化のトレーニングをおこない、この結果ジャンプ力の増強に著しい効果をあげている。実際にバレーボール選手の背筋力をみても、1964年（昭39年）東京オリンピックの候補選手の値ですでに197.2±23.8kgであり、ジャンプ力を垂直跳びでみて77.7±6.1㎝となっている。ハンドボールにおいても、シュートやパスにジャンプ力が必要である。そこで上記のバレーボールの選手の値と比較すると、昭和44年ハンドボールナショナルチーム選手は、背筋力175.0±18.5kg垂直跳び57.7±5.6kgであり、バレーボール選手にくらべてきわめて低い値いであるといわざるを得ない。また握力、背筋力は、ボールスピードと密接な関係があり[8]、この点でも、腕力を含めて握力、背筋力の強化が重要視される。



第2図 年度別平均値の推移
（機能）

第2表 他種目との比較

項目＼種目	バレーボール	サッカー	バスケットボール（参考）	ホッケー
身長 cm	181.6 (6.1)	168.9 (4.9)	183.3	165.2
体重 kg	74.8 (4.1)	63.3 (4.5)	76.2	57.7
胸囲 cm	93.4 (3.5)	85.2 (2.6)	92.8	84.4
ローレル指数	125.6 (10.1)	131.0	123.7	129.0
握力 kg 右	54.4 (3.3)	47.1 (5.1)	53.3	
握力 kg 左	48.6 (4.5)	42.1 (5.9)	58.7	
握力 kg 右+左	103.0	89.2	112.0	
背筋力 kg	197.2 (23.9)	157.1 (1.6)	155.0	
垂直跳 cm	77.7 (6.1)	52.2 (4.0)	59.0	
体前屈 cm	14.1 (3.9)	——	12.6	
肺活量 ml	——	4535.1 (6.0)	——	

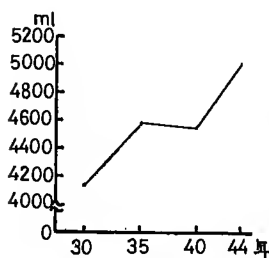
(S. D.)

柔軟性

柔軟性については、昭和35年の13.5㎝が昭和40年13.1㎝、昭和44年12.6㎝であった。柔軟性は、関節自体の可動性と筋や靱帯の弾力性が大きく関与し、関節の運動領域の大きさを反映するものであり体力の重要な一要素としてとりあげられている。しかしこの静的な柔軟性がスポーツの場での動的な柔軟性（見た目の動作のやわらかさ）に一致するものではない。したがってわれわれは、この柔軟性を余り重くみない。しかし柔軟性が余りにも悪いものは、やはり競技力に悪い影響を与えるものと考え測定したものである。文部省資料[2]における柔軟性23才男子14.6㎝であり、この程度の柔軟性はほしいものである。

肺活量

肺活量についてみると（第3図）のとうりである。昭和30年、4126.0㎖、昭和35年4580.0㎖、昭和40年4529.0㎖、昭和44年5014.9㎖となっており昭和30年～昭和44年の間に約900㎖の増加となっている。一般にスポーツマンは体格が大きく肺活量も大きい。ハンドボール選手における15年間におけるおよその1ℓ肺活量の増大はこの体格の向上を考慮しなければならない。肺活量は、からだの大きさに比例するとされている。これを比肺活量でみるとからだの大きさの因子が除かれることになる。比肺活量が大きいことは、実質的呼吸面の機能の増大と考えることができる。さてハンドボール選手について比肺活量をみると、昭和30年101.0%、昭和35年111.0%、昭和40年111.0%、昭和44年114.5%であり、昭和30年のそれを除いて100%よりやや高い値を示している。ハンドボールの練習や試合に伴う呼吸機能面の改善効果ということができる。



第3図 年度別平均値の推移
（肺活量）

2 外国チームとの比較

日本のナショナルチームについて昭和30年から昭和44年現在に至るまでの形態面と機能面の推移をみてきたが、次にこれを外国選手との対比において検討してみた。方法としては、①たまたま、昭和30年に来日した西ドイツ男子チーム[1]および昭和35年来日したルーマニヤ男子チーム[2]（いずれ当時

世界のトップレベルのチームであった）とそれぞれの年度における日本の代表チーム選手と比較し、同時に第7回ハンドボール世界選手権大会（1969年度昭年44年）の西ドイツ、ルーマニアチームの選手と日本のナショナルチームの選手とを比較することによって、日本のハンドボール選手の体力の推移を国際的レベルにおいて検討した。②また第7回ハンドボール世界選手権大会に出場した各国チーム（第5表）の選手の体力を、日本選手体力と比較検討をした。Parameterとしてとりあげた体力は、測定されている共通項目である身長、体重の形態面である。機能面については、比較検討ができるものがなかったので、ここでは割愛した。尚今後、機能面でも、対比できるように配慮することは、日本のハンドボールチームを強化するためにも、またハンドボール全体を科学的な視野において検討するためにも大切である。

① 外国および日本チームの体力の推移とその比較

第3表（第4図）はドイツチームと日本チームの身長体重の推移である。身長については、日本チームは昭昭30年169.1cm、昭和44年179.0cmと著しく伸長しているのに対して、西ドイツチームは昭和30年、183.4cm、昭和44年184.0cmと身長の上では、殆んど差がみられない。したがって、昭和30年度における西ドイツと日本チームとの身長差が14.3cmもあったのに対して昭和44年には5.0cmと両国の身長差が著しく小さくなっている。体重については、西ドイツチームは、昭和30年度83.0kgよりも昭和44年80.8kgとかえって減少しているのに対して、日本チームは昭和30年64.1kg昭和44年71.9kgと著しい増大がみられ、したがって昭和44年度における両国チームの体重差は昭和30年に比して著しく小さくなっている。同様に昭和35年に来日したルーマニアチームと日本チームについて昭和35年と昭和44年の身長、体重の推移を比較すると、身長において昭和35年度（第4表）10.3cmの差が、昭和44年度6.2cm差になっており、体重においては、昭和35年度13.5kgの差が、昭和44年度10.3kg差と形態面において差が小さくなっていることがわかる。この形態面における接近化は、日本選手の形態面における増加促進現象によって達成されているものである。このように日本チームは、近年身長、体重において著しく伸長し、外国選手に接近してきたが、それでも尚昭和44年現在において西ドイツチームと比べ身長5.0cm、体重8.9kgとかなりの差がみられる。この形態面での劣勢が、筋力、パワー・スピードなどの体力に影響し、作戦面での不利益はまぬがれないであろう。

② 第7回ハンドボール世界選手権大会出場チームとの比較

第7回ハンドボール世界選手権大会に出場した各国のチームについて、その身長、体重およびローレル氏指数をくらべ、これを同選手権大会に出場して10位となった日本チームのそれと比較したのが第5表である。国名の記載順は大会の成績順である。身長では、スエーデンチームの平均187.2cmを筆頭に16ケ国のうち14ケ国までが平均180cmを越えており、170cm台は日本と最下位の米国の2チームにすぎない。米国が177.8cmを身長が最も低いが、これは、以前日本において、ハンドボールの普及度が低かった当時ハンドボール全日本級の選手の身長が一般学生の身長と殆ど変りなかったことと同じ原因によるものと推定される。つまり、米国は、世界選手権大会には、はじめての出場であり、その普及度は他の参加国にくらべて著しく低いことによるのであろう。この層のうすさが米国チームの平均身長を低くした最も大きな原因と考えられよう。今後予測できることは、米国でも、ハンドボールの普及度が高まり、層が厚くなれば、身長の大きい選手が選ばれてくるであろうということである。日本チームは民族的にこの形態面で劣っている点で著しい不利益をこうむっているが、それでも

第3表 西ドイツチームと日本チームの形態の比較

項目＼年度・国名	昭和30年 西ドイツ	昭和30年 日本	昭和30年 差	昭和44年 西ドイツ	昭和44年 日本	昭和44年 差
身長(cm)	183.4	169.1	14.3	184.0	179.0	5.0
体重(kg)	83.0	64.1	18.9	80.8	71.9	8.9
比体重	45.3	37.9	7.4	43.9	40.2	3.7

第4表 ルーマニアチームと日本チームの形態の比較

項目＼年度・国名	昭和35年 ルーマニア	昭和35年 日体大	昭和35年 差	昭和44年 ルーマニア	昭和44年 日本	昭和44年 差
身長 cm	179.0	168.7	10.3	185.2	179.0	6.2
体重 kg	77.3	63.8	13.5	82.2	71.9	10.3
比体重	43.1	37.8	5.3	44.4	40.2	4.2

第4図 身長、体重の国際間の比較

第5表 第7回（1969年）ハンドボール世界選手権大会出場チームの体格

国名＼項目	年令	身長 cm	体重 kg	ローレル指数
ルーマニア	25.7	185.2	82.2	129
東ドイツ	27.9	182.2	80.0	132
ユーゴスラビア	24.3	183.8	81.2	131
デンマーク	26.3	185.2	83.3	131
西ドイツ	24.4	184.0	80.8	130
スウェーデン	25.4	187.2	82.7	126
チェコスロバキア	26.4	180.0	80.3	138
ハンガリー	25.6	185.5	81.1	127
ソビエト連邦	27.1	182.2	78.7	130
日本	23.8	179.0	71.9	125
アイスランド	23.8	184.5	79.0	126
フランス	25.3	181.7	80.7	135
ノルウェー	25.4	185.3	81.0	127
ポーランド	24.6	183.2	80.8	131
スイス	25.4	181.5	79.4	133
アメリカ	25.9	177.8	79.8	142
平均	25.5	183.2	80.2	133

(1970.2)

179.0cmと180cmに近い選手層になっており、この身長からも、ハンドボールの日本における普及度、そして機能面、技術面を含めた戦力の高さが推定でき、世界選手権大会において10位という成績をかち得たのであろう。今後によい成績をあげるためには、最大の努力で形態面で大きな選手が選ばれるように配慮すると同時に、この形態面の不利をカバーするだけの機能面の強化と技術面の開発が望まれるのである。以上述べたように、身長において日本チームは、他の国のチーム選手にくらべ明かに劣っているが、それでも、その差は、最大身長をほこるスェーデンチームにくらべておよそ8cmである。それに対して体重の面では日本チームは出場国の最下位であり、しかも、他の国のチームの平均体重が79~83kgの巾の中におさまっているのに対して、日本チームはひとりの低いレベルにしかない。つまり身長の差よりも日本チームの選手の体重の低さが著しく目立っている。体重の低さは、パワーの低さでもあり、相手の選手と接触した場合とが、シュートをおこなうときとか、攻撃面でも防禦面でも不利益をまぬがれない。日本チームは、身長の面では、かなり外国チームに近づいてきたが、体重面では全く劣っており、この面での配慮こそ重要な問題である。身長が高く体重が大きいことが戦力をます上に重要な要素であることは既に指摘したが、しかし、身長と体重のバランスが重要であることは、いうまでもない。

このバランスがローレル指数にあらわれている。出場各国チームの選手のローレル指数の平均値は125~142の範囲にあり、その中で日本チームは125の最低である。また、競技成績最下位のアメリカチームは、ローレル指数が142の最高値を示した。ローレル指数を概観して130程度がハンドボール選手として機能面でも技術面でも充実した状態ということが推定される。

要　約

1　全日本ハンドボール選手の体力の推移を要約してみると

形態面では

①身長については、昭和30年~昭和40年には殆んど変化はみられなかったが、昭和44年では178.7cmと9cmの伸びを示している。

②体重については、昭和30~昭和40年とあまり変化がなかったが昭和44年では、72.2kgと身長と同様の傾向をみることができた。

③胸囲については、昭和30~昭和40と変りがないが、昭和44年には94.4cmと身長、体重と同じ様な伸びがみられた。

④またこれをローレル指数すなわち、肥満度あるいはからだの密度をあらわすものからみると昭和30~昭和40年では、132.7~133.0であったのが、昭和44年には、126.4と著しい低下がみられ、体型の細長化傾向がみられた。

機能面については

①筋力の指標とする背筋力、握力は、昭和30年~昭和40年には両者共にあまり向上の変化はなかったが、昭和44年には、背筋力175.0kg、そして握力の左右合計値は、108.1kgと大きくなっていることがわかった。この傾向は、体格の場合と一致している。

②パワーの指標とするサージャントジャンプの推移をみると昭和35年—昭和44年には約2cmの伸びしかなく、これを東京オリンピック時点でのバレーボール選手(77.7±6.1cm)と比較するときわめて低いことがわかった。

③柔軟性については、立位体前屈度を測定、昭和35年、40年とそれぞれ13.5cm、13.1cm、昭和44年12.6cmであった。

④肺活量についてみると、昭和30年4126.0ml、昭和35年4580.0ml、昭和40年4529.0ml、昭和44年5014.9mlとなっており、昭和30年~昭和44年の間には約1000mlの差がみられた。

2　外国チームとの比較

①西ドイツチームとの比較

身長については、昭和30年度における西ドイツチームとの身長差が14.3cmもあつたのに対して、昭和44年には、5.0cmと両国間の身長差が著しく小さくなっている。

体重については、西ドイツチームは、昭和30年度83.0kgよりも昭和44年80.8kgと減少しており、日本チームは、昭和30年64.1kg、昭和44年71.9kgと著しい増大がある。

②ルーマニアチームとの比較

ルーマニアチームと日本チームについて昭和35年と昭和44年の身長、体重の推移を比較すると、身長において昭和35年度10.3cmの差が、昭和44年度6.2cmの差になっており、体重においては、昭和35年度13.5kgの差が昭和44年度10.3kg差と形態面において差が小さくなっている。

③第7回ハンドボール世界選手権大会出場チームとの比較。

出場チームの身長、体重およびローレル指数をくらべてみた。身長については、各国の平均値は183.3cm日本チームは平均179.0cmと他の国のチーム選手にくらべ明らかに劣っていることがわかる。体重面については、日本チームは出場国の最下位であった。

出場各チームの平均ローレル指数は125~142の範囲にあり、日本チームは、最低値を示しており、米国は高値を示している。日本チームは、細長型であり、米国は肥満型であることが考えられる。身長に釣合った体重という点においても日本チームの選手は体重を増す必要があると考える。

文　献

1) 荒川清美：日独ハンドボール選手の体格について、体育学研究 10(7), 151~152, 1957
2) 北村和夫他：日本、ルーマニアのハンドボール選手の身体計測について、OLYMPIA, N.3, 55~57, 1961
3) 高嶋　冽他：ハンドボール選手の適性についての研究(第1報) 体育学研究、9(4,5)104~110, 69~115, 昭和38年4月
4) 和泉貞男他：東京大学教養学部学生の体格と運動能力　東京大学教養学部体育学紀要、第2号
5) 猪飼道夫他：陸上競技、東京オリンピックスポーツ科学研究報告、37~110, 965, 日本体育協会スポーツ科学研究委員会
6) 朝比奈一男他：バレーボール、東京オリンピックスポーツ科学研究報告、260~278, 1965, 日本体育協会スポーツ科学研究委員会
7) 文部省体育局：昭和43年度体力、運動能力調査報告書、212, 昭和44年3月
8) 豊島進太郎他：ハンドボールにおける投球動作の分析、体育学研究、12(5), 202, 1968

機関誌の取扱いに慎重さをのぞむ

光島磯雄

前々号（第八四号）の小筆にあえて再び加筆強調する意味で左の文をつづる。

今まで幾度かこの機関誌上で、日本協会は読者の中で諸外国のハンドボール情報を持つ者の協力援助を大いに期待するむねの要望記事が掲載されたことを記憶する人が多いと思う。

しかるに、私が先般聞知したところによれば、真に驚くべきことには、又なげかわしいことには、日本協会は諸外国に対して、我が日本ハンドボール界の出来事、内外情報、各種研究等貴重な内容が盛り込まれた機関誌をこともあろうに本年のオリンピックアジヤ予選の強敵である韓国へも彼らの注文に応じて送付しているという。しかもこれはもうずっと何年にもわたってとは。如何に彼らが費用を支払った上での正当な文書講読であるとはいうものの、今年という年が重大な年であるという意識のもとではこれは明らかに『利敵行為』といえるのではないか？情報がほしいというかたわらで自由の情報の満載された機関誌を長い間提供して来たことについて関係者の猛省を促したい。

日本協会が儀礼交際上又は外国の注文に応じて機関誌を外国へ送付することは一面においては友好親善の役目をはたしているといえなくもないが、現今の日本ハンドボールの興亡を賭けたオリンピックアジヤ予選臨戦態勢下にあって機関誌の送付は正に有害あって一利なしと断定するのが常識である。

韓国が今まで毎月送られてくる日本ハンドボール機関誌をどのような意識で分析検討を続けたであろうかと推測するとき、しらずしらずのうちに肌に粟の生ずる戦りつ感におそわれるのは私だけであろうか？特にかの国では、中年以上の人達はほとんど日本語を理解するという一事をもあわせて考えればその結果は火を見るより明らかである。極言するならば日本協会の先見の明の不十分のおかげで、彼らは今まで苦労することなく僅かの費用で日本のみならず世界のことまでわかる情報の宝の山を入手していたのである。しかもこれが正当な商取引関係であることが私をことさらにいらだたせる。

前々号（八四号）でも一部触れたごとく、我々島国の国民はあまりにも大陸の人間を知らな過ぎる。長い間海という自然の障壁に囲まれて外敵の侵入をうけることなく、農耕を中心に比較的定着と安定に恵まれた生活を続けてきた日本人と、狩猟牧畜と民族闘争による歴史伝統を継承してきた大陸民族との性格特徴の比較検討（両者の長所短所）をこの際あらためて徹底的に考察すべきであると声を大にして言いたい。

世界のすべての人々があこがれるオリンピック出場に関して、日本がそうであるように韓国もまた日本に対しスポーツによって勝つことで積年のうらみを晴らそうという気構が心底にあることを我々は厳然たる歴史的事実の上に認識しなければならない。彼らは明らかにこれを百も千も心得ているのだ。その証拠に、我々が彼らに関する情報入手にどれだけの実績があるのかと問いたい。彼らがその国の機関誌その他を送ってくれたことが今までかつてあったのかどうか？

相手のことを知ろうとする努力はもとより大切であるが、それ以上に重要で容易なことは、いかにして自身を相手に知らせないようにするかということである。大東亜戦争開戦の前後半年間にあれだけの精細綿密な計画性を示し絶大な効果をあげた一面に対し、戦争を終らせる青写真については何らの策も用意していなかった旧日本帝国の情報処理の不徹底ぶりを思いおこす人も多いであろう。いわんや偵察力、情報処理能力の劣った近眼の巨人など阿呆の猪と同じで、少し冷静に対処出来る能力のある相手から見れば全くこわいものではないのである。日本は『巨人』か？

日本人は熱しやすくさめやすいといわれる。農耕は種子をまいた後は多分にお天気まかせ土地まかせであるが、狩猟はその時その時が身命を賭けてえものを狙い、争い、殺すという人間の闘争本能の正念場なのである。大陸民族の歴史は昔から激烈な闘争の反復連続であることを知るとき、日本戦史をひもといてみても、隠忍自重長期にわたって防禦戦や籠城戦を戦ったということはほんの数例に過ぎぬほど短期決戦のくりかえしであったことを知る。こういう比較考察によっても、日本人の思考型式には、深謀遠慮にして綿密入念な『心理的な諸条件を必要とする事柄すなわち情報収集活動』の実行には民族的性格が向いていないのではないかと思われるのである。

彼らの個々の技術はまだ大したものではない、あの程度の選手なら日本には沢山いる。国際経験は対日本以外にもっていないなどというなかれ、イスラエル、韓国とともに日本とは極端にかけはなれた

あらゆる意味で異常な環境にありしかも強じんな闘争心をもっていることを念頭におけば当然おそるべき強敵であることは自明の理である。西欧に目を向けすぎている間に足もとのひよこはすでに『わし』になりつつあるのだ。それも動物園の温室で育ったものとは全く異なる土性骨たくましいものに!!

くれぐれも言いたい。十一月に行われる六試合は決して親善ではないのだ。スポーツの名による民族闘争なのである!!敗者はほろびるか出直すかである。

二月に行われた札幌国際競技大会、四月の世界卓球大会、そして二月の四日市での韓国女子ハンドボールチームの態度にも示された大陸民族の闘争心団結心(応援も)の強烈さから推測しても、十一月の試合には興奮のあまり不祥事のおこらぬよう実施関係者は万全の策を講ずることを怠ってはならないことも付け加えたい。

機関誌の対外送付は中止出来ればそれにこしたことはないが、不可能ならばせめて本年十一月までは内容的に対外考慮を要する記事原稿には充分な検討を加えられるような配慮をのぞむことは、憲法の保障する『表現の自由』を侵すことにつながるかも知れないが、至上命令であるオリンピック出場という日本ハンドボールの利益のためを思うこの一念は、もとより全国ハンドボールファンの共通観念であることを信じてうたがわない。

関係者のより高い英知と決断を期待してこの稿をおわらせていただく。

光島氏に答える

編集部　藤本　強

光島氏のオリンピック出場への熱意、それは今回の文章でも、84号に掲載した文章でも、その熱烈な思いは全く同感である。

この11月がある意味において、日本ハンドボール界三十有余年の歴史の総決算であることには、全く異義を唱える余地はないものと考える。

今後のハンドボール界の大きな転機になることも、これに破れれば、日本のハンドボール界が5年あるいは10年発展が遅れるであろうことも疑えない事実であろう。

しかし、観点をかえて考えるならば、全く別な見方をすることも可能である。

光島氏は『利敵行為』、『百害あって一利なし』と機関誌の送付について断じておられる。

果してそうであろうか。世界的に見て、特に我が日本のある東アジア地域に於いて、ハンドボールはマイナーな競技であることは万人が認めるところであろう。

これを日本だけの発展を考えるのでなく、ハンドボールのアジアでの発展を考え、本誌がいささかでもそれに寄与できているとすれば望外のところである。

今回のオリンピックの出場問題をとってみても、ハンドボール界がヨーロッパ偏重であることは疑いのないところであろう。

全16ケ国の出場ワクのうち、13をヨーロッパが占め、アジア、アフリカ、アメリカで各一つというのはどうみてもアンバランスである。現状では、これもいたしかたのないところであろう。しかし、このような状況が続く限り、ハンドボールがオリンピック種目として、常時開催されることには、多くの困難がつきまとおう。

また、たとえ常時オリンピックで開催されるとしても、現在の東アジアの状況を大きく変えて(もちろん質量ともに各国に普及発展させて)いかない限り、一つの座を死に物狂いで争う状況が続こう。

このようなことを考えるならば本誌が東アジアの地域のハンドボールの発展のために、現在、いささかでも役立っているのではないかと自負している編集部としては本誌の送付が決っして利敵行為とも百害あって一利なきものとも考えていないのである。

呑気なことを言ってと叱られる読者もいられることであろう。しかし、オリンピックの度に発送をやめることをくり返していたならどういうことになろうか。たとえ直接韓国に送付しないとしても、入手の手段はいくらでもあろう。

東アジアのというよりは、世界のハンドボール界の発展ということを考えるならば、互いの情報を包み隠さず交換しあう。その上での勝負ということが考えられるのではないだろうか。日本のハンドボール界の発展ということにあまりにもこだわりすぎることは、大きな将来への見通しを誤ることになるのではないだろうか。

送付の件についての解答はこれまでとし、対外考慮を要する記事云々の件であるが、本誌はハンドボールファンにハンドボールについてのあらゆることに関して、知ってもらい、考えてもらうことを旨として、あくまでも、日本のハンドボールファンを対象として、編集しているつもりである。前に東アジアのハンドボール云々と書いたのはあくまでも副次的な産物であり、本来の使命は日本のハンドボールファンのためにあるのである。そのファンに対して、対外考慮をするあまり、多くのことが本誌から欠除してしまう事態がたとえ短期間であれ、生ずることは本誌の使命をまっとうしないことになるのではないだろうか。読者の方々の御意見は、いかに？

春の学生リーグ戦開く

春の学生シーズンが幕をあけた。関東は駒沢で、関西は京都で、東海は名古屋で4月24日一斉に室内で熱戦の火ぶたを切った。

各校とも有力選手の卒業で新戦力の増強に懸命、それだけに新鮮味にあふれた序盤戦の展開となっている。

女子の関東で東京女体大が東京教大に、東海で中京大が中京女大に敗れる波乱が早くも起こった。また関東2部（男）で東京学芸大が明治、慶応を降して4勝、初優勝の色を濃くしているのも話題。

本誌〆切りまでの各地1部及び女子の記録は次のとおり。

◇関東男子（第4日まで）

日体 21—9 東京教大
芝浦工大 25—18 日大
中央 27—7 立教
早稲田 12—11 法政
法政 28—17 立教
日体 22—12 日大
芝浦工大 23—9 東京教大
中央 18—12 早稲田
芝浦工大 23—8 早稲田
中央 17—7 東京教大
日体 26—6 立教
法政 21—15 日大
中央 23—6 日大
日大 17—2 早稲田
法政 27—16 東京教大
芝浦工大 14—9 立教

◇関東女子（第4日まで）

東京教大 7—6 東女体大
日体 21—1 東京学芸大
東女体大 7—3 東京学芸大
日体 11—4 東京教大

◇関西男子（第2日まで）

大阪経大 25—12 関西大
大阪体大 22—14 関学
同志社 18—7 甲南
関学 17—10 甲南
大阪経大 10—8 大阪体大
同志社 18—14 関大

◇関西女子（第2日まで）

大阪教大 8—7 武庫川女大
大阪体大 25—4 夙川女短大
甲子園 23—0 大阪薬科大
甲子園 23—1 武庫川女大
大阪体大 17—4 大阪教大
夙川女短大 15—11 大阪薬科大

◇東海男子（第3日まで）

中京 29—7 南山
岐阜大 16—14 名古屋大
名城 26—11 愛知教大
中京 21—8 名古屋大
名城 20—8 南山
愛知教大 15—10 岐阜大
愛知教大 17—14 南山
名城 25—3 名古屋大
中京 22—3 岐阜大

◇東海女子（第3日まで）

中京女大 14—11 中京
中京 15—4 愛知教大
中京女大 14—1 愛知教大

東北北海道は東北大

第5回（秋との通算第20回）東北北海道学生春季選手権は5月1日から北大で行われ東北大が仙台大を19—01で破り優勝した。

（注）本誌では次号に「各地学生春季リーグ特集」を予定しています。

新役員など決まる　全日本学連

全日本学連は4月4日東京で理事会を開き、新年度役員、日程などを次のように決め発表した。

【役員】▽会長　西敏郎（慶大出）▽理事長　田中秀夫（中大出）▽理事　安藤純光（法大出）、江名英彦（立大出）、堀和義（大阪府大出）、久保義雄（同大出）、宇津野年一（日体大出）、中沢重夫（芝工大出）福地賢介（早大出）▽委員長　奥田祥一（日体大4年）▽副委員長　今井昇一（国士館大4年）▽会計　藤森妙子（東女体大4年）

【行事日程】▽第5回日韓学生交流　7月中旬（ソウルほか）△第1回日韓女子学生交流　6月（東京ほか）▽第21回（女子第2回）全日本学生選抜東西対抗（9月18日・愛知県体育館）▽第14回（女子第7回）全日本学生選手権（11月3日〜7日・東京）

新会長に江藤淳雄氏　全日本自衛隊連盟

全自衛隊連盟は日本協会加盟を機に「全日本自衛隊連盟」と改称することになり日本協会へ届出た。恒例の全自衛隊選抜選手権も今シーズンから全日本自衛隊選手権に改められる（本誌16頁参照）。

また、森川竹雄氏に代って新たに江藤淳雄氏（防衛庁人事教育局長）が会長として就任された。

第5戦は本田技研　対スウェーデン

日本協会は対戦希望地の重なりあいから未定のままだった今秋の日本・スウェーデン国際試合第5戦を9月12日四日市体育館で本田技研と行うことに決めた。

保坂副会長　体協理事に

日本体育協会は3月27日東京で評議員会を開き役員改選などを行ったが、理事(22人)に保坂周助氏（日本ハンドボール協会長、神奈川県体育協会長、同ハンドボール協会長）が地方団体選出として重任された。

中国協会新役員

中国協会では昭和46年度新役員を次のように決め発表した。

▽会長　川上正幸▽理事長　丸口哲美▽審判部長　柳井文治▽技術部日本協会派遣員　辻一義▽普及部日本協会派遣員　髙木敏行

◎球界パトロール（投稿歓迎）

全名大クが台湾遠征

親善普及に大きな成果あげる

全名大クは3月20日名古屋を出発し、台湾に遠征し、四度の親善試合を行なうとともに、技術、審判上の講習をも併せ行ない好評を得た。新聞にも大々的に採りあげられ、大観衆を集めたグランドで四戦を行ない全勝の成績を残し、3月24日無事帰国した。

このような形の海外遠征が友好親善の目的とともにハンドボールの普及につながることは疑いをいれないところであり、きわめて好ましいことである。

今後とも、このような形の海外遠征がどしどしなされることが望まれる。

全名大ク 37（19—10、18—4）14 台北師範専科学校
全名大ク 35（16—10、19—11）21 台北体育専科学校
全名大ク 25（11—3、14—2）5 台中県教員
全名大ク 32（19—7、13—6）13 台北師範大

台湾遠征回顧

全名古屋大学ハンドボールクラブ
監督 関口 昇

我が全名大クラブは去る3月20日～24日の4泊5日台湾観光を兼ね遠征試合を行なった。愛知クラブリーグの中堅でしかない未熟な我が部にとってどんな成績が残せるか疑問であったが、少なくとも恥かしくないゲームが見せられるよう練習を重ねた。しかし訪台した日から連続4日間、この間台北～台中を往復するという強行日程の中で毎日ゲームをして呉れるよう頼まれ満足した状態での内容ではなかったが、別にあるような記録を残すことができた。

台湾のチームは一口に言って未だバスケットから抜け出ずハンドボールの投げ方になっていない。従ってハンドボールゲームというまでには至っていない状態であるが、台中台北の技術及び審判講習会には熱心な方々が多数集まり、又我々が台中で小学生のゲームを見た感じでは今後の飛躍を充分に約束させてくれた。

宋氏の御厚意にすがって訪台したにも拘らず、4ゲームとも数百名を超える観衆にかこまれ、且つ新聞にも大々的に採り上げられ、香港からもわざわざ8ミリを持参して揚氏が見学に来られるなど、台湾をはじめ極東での今後のハンドボール発展に多少とも役立つことが出来たと自負しています。現在台湾では資金がないため公式的な海外交流が出来ない状態ですので今後も日本からどんどん遠征して刺激を与えてやって載きたいと私からもお願いする次第です。

尚紙面を借りて終始我々の行動を統率して下さった伊藤和夫団長4ゲームとも模範的に審判をして下さった山田仁止副団長に御礼申上げると共に、宋丙堂氏・陳金樹総幹事・温展洪氏ら中華全国手球委員会の皆様に心から感謝の意を表します、謝謝。

260人のジャンボ合宿

熊本で高校女子が合同練習

◇……255人のジャンボ合宿。もちろん一つのチームではない。14の女子高校が西から東から集ったものだ。

日本一の女子チーム大洋デパートのおひざもと熊本では4、5年前から高校女子チームの合同練習が盛んになった。

南国九州、春の訪れは早い。3月末ともなれば暑い日さえある。

〝今年こそ〟と張り切る各チームがたがいに腕をみがきあうには絶好の場所。大洋デパートという〝生きた手本〟もあり、高校女子チームにとって「熊本」は魅力にあふれたハンドボールの町なのである。

◇……年々合同練習の噂を聞いて集るチームは増える一方。今年は九州5県に兵庫、山口の本土勢も加って14校とふくれた。3月25日から4月3日まで熊本女商、九州女学院に5つのコートをつくったがとてもマにあわない。ランニングで時間待ちというチームが毎日必ず見られた。

参加各校のコーチたちは「日ごろ不足がちな練習試合を中心に戦術研究や基礎体力を養成するうえに実にありがたい〝催し〟です」という。

◇……勝負はともかく、いろいろなタイプのチームと試合をというわけでスケジュールを組んでみたらなんと75試合、このほか「是非チャンピオンの胸を借りたい」との希望から大洋デパートが16試合（Aチーム6、Bチーム10）をつきあった。合計91試合。ピークの3月29日は1日で21試合を数えた。熊本女商が21、佐世保商（長崎）、島原農（長崎）、高水（山口）が各17試合を消化したのをはじめさすがに伸びざかりの高校生、疲れるどころかどのチームも一日一日と力をつけるのが目にみえた。

レギュラーに故障者が出て新人を起用、控えの戦力が厚くなったと喜ぶコーチもいる。

◇……選手の宿舎は熊本女商、九州女学院の協力で両校の寮があてられたが、はみ出たチームは市内の旅館に実費で泊めてもらった。

熊本協会役員や地元高校OG、大洋デパート部員は合宿期間中、毎日文字どおり朝から晩まで各チームの面倒をみた。すべてが好意につつまれた合宿なのである。

	試	勝	分	負	得	失
熊本女商	21	10	3	8	155	167
佐世保商	17	10	1	6	152	124
島原農	17	13	1	3	147	85
高水	17	6	1	10	98	151
古賀	14	8	0	6	121	81
神戸商	11	3	0	8	86	136
九州女	10	0	0	10	42	112
神埼農	9	4	1	4	78	72
徳山	9	5	1	2	64	40
熊本市立	6	4	1	1	72	56
財部	6	1	2	3	41	51
尚絅	6	1	1	3	38	33
加治木	5	2	0	3	42	33
明善	2	1	0	1	10	12

（注） 対大洋戦は除く。徳山—尚絅戦は記録不明のため試合数のみ。

練習や試合のあいまに他のチームの選手とも仲良くなった。
満開の桜を背にそれぞれの故郷へ戻る選手たちのお別れの挨拶は決まっていた。「夏のインター・ハイで必ず会いましょうネ」―。
◇19頁の表は高校女子熊本春季合同練習・試合（20分ハーフ、15分ハーフ）成績

（試合数順・本誌調べ）

〝いつも勝っておとうさん〟

稲石典久君の詩に曲が……

◇……「新聞にのっていたきみの詩がとてもよいと思ったので曲をつけてみました。すこしむづかしいところがありますからよく練習してじょうずに唱って下さい」――名古屋市立桜小学校4年生の稲石典久君（現5年）のところへ、池田稔さんという作曲家から突然こんな手紙が楽譜とともに送られて来た。典久君はもちろん、家の人たちも池田さんという人に心当たりはなかった。

◇……池田さんの心をとらえた典久君の詩は、ハンドボールに熱中しているお父さんを詠んだもので去年の夏に新聞（名古屋）の「小さな目」という欄に載った。

『おとうさん』
ぼくのおとうさんはまっ黒だ。
ハンドボールが好きだ。
年中勝った負けたといっている
勝ったときはにこにこ顔
負けたときはしょんぼり顔
にこにこ顔はおねだりの日
ぼくのうれしい日
しょんぼり顔は悲しい日
いつも勝っておとうさん
ぼくの好きなおとうさん

◇……注意深い読者なら典久君の苗字をみてお気づきだろう。稲石三二氏。名古屋の桜台高校教諭、同校監督、元全日本コーチ（第6回世界選手権コーチ）、現国際公認審判員、愛知協会常任理事。

毎日ハンドボール、ハンドボールに明け暮れている虫だ。

そんなお父さんを長男典久君の目はすなおにズバリと切りこんだ
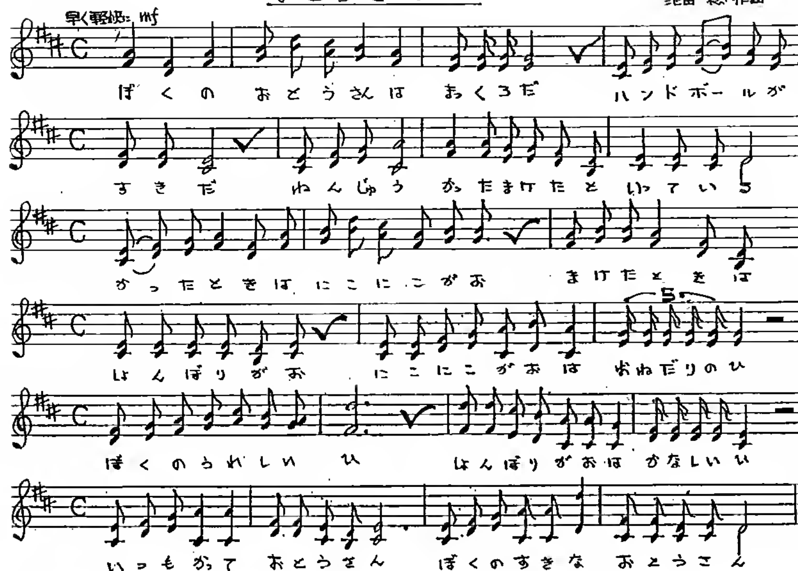
『よくある話かも知れません。でもこのような家庭をもった人も多いと思いますし子が親をみている眼のまっすぐさがでているように思えるのです』と三二氏はいう

◇……三二氏のハンドボールにかける情熱のエピソードは多い。典久君の詩が新聞に掲った時も「ハンドボール」という活字が新聞に出ていることのほうがまず嬉しかった、というほどだ。

典久君自身も、名古屋市少年ハンドボール教室の一員で、西ドイツを迎えた国際試合の前座戦で妙技をみせた〝蛙の子〟である。

◇……去る日、池田さんのつけた曲を典久君たちは学習発表会で一生懸命うたった。病床にある池田さんがこの会に顔を見せられなかったのは稲石一家にとって残念だったが、子供たちの清らかなうたごえを耳にしながら三二氏は「この詩を思い出しながらこれからもハンドボールの道を歩んでいこう」と誓ったそうだ。

ハンドボールの虫。純情な小さな目。少年の心にひかれた作曲家。ほのぼのとした三つの輪が一つになってできたうた。あなたも練習帰りに口ずさんでみて下さい。



各地の記録

ワクナガ薬品が勝つ

西日本一般男子

第10回西日本一般男子選手権は大阪市中央体育館に8県の代表9チームが参加して行われた。

ベストフォアには6度目の優勝を狙う大阪イーグルスのほか初優勝をめざす近畿勢が勝ち残ったがオリンピック候補をようするワクナガ薬品(大阪)がセット攻撃と速攻を織りまぜた多彩な攻撃で激戦をぬけでて初優勝した。なお、前回優勝の住友化学菊本(愛媛)は姿を見せなかった。

▽1回戦（1試合）

奈良ク(奈良) 33－16 全倉敷(岡山)

▽準々決勝

奈良ク 25－22 全熊本

ワクナガ薬品(大阪) 33－11 和歌山教員

スワロー兵庫 28－18 伏見ク(京都)

大阪イーグルス 17－15 山口外郎ク

▽準決勝

ワクナガ薬品 36（20－14、16－7）21 奈良ク

スワロー兵庫 13（7－5、6－5）10 大阪イーグルス

▽決勝

ワクナガ薬品 33（15－9、18－9）18 スワロー兵庫

佐野エクが優勝飾る

近畿でもクラブ選手権

東海につぐ全国二番目のブロッククラブ選手権として第1回近畿クラブ選手権が3月14日、3月21日奈良県畝傍高校体育館に近畿5県から15クラブが参加して開かれ佐野エクが奈良クラブを決勝で破り、初優勝をとげた。

▽1回戦

八尾ク(大阪) 8－7 北陽ク(大阪)

八幡工OBク(滋賀) 没収 雪陵ク(大阪)

奈良ク(奈良) 43－2 デンタルス(大阪)

洛東ク(京都) 12－12 抽せん勝 寝屋川ク(大阪)

城東エク(大阪) 31－7 生駒ク(奈良)

上宮ク(大阪) 23－14 鈴蘭台ク(兵庫)

佐野エク(大阪) 21－11 大商ク(大阪)

▽準々決勝

伏見ク(京都) 18（12－4、6－2）6 八尾ク

奈良ク 24（13－6、11－6）12 八幡工OBク

洛東ク 17（9－7、8－6）13 城東エク

佐野エク 棄権 上宮ク

▽準決勝

奈良ク 20（9－7、11－6）13 伏見ク

佐野エク 20（8－12、12－0）12 洛東ク

▽決勝

佐野エク 25（15－7、10－8）15 奈良ク

大同製鋼、本田破り初優勝

田村紡、辛くも7連勝

第10回東海室内選手権はNHK杯をかけて2月21日浜松市体育館に東海4県の予選勝者男女各4チームが集りトーナメントで行われた。

男子は、予想どおり大同製鋼(愛知)－本田技研(三重)の実業団同士の決勝となり、大同が前半一気に14点を連取、あっさり勝負を決めた。大同製鋼は初優勝、愛知代表の優勝は2年連続8度目。

女子は田村紡(三重)が7連勝を飾ったが、決勝ではブラザー工業(愛知)の猛迫にあい辛勝だった。

▽男子準決勝（1回戦）

本田技研(三重) 18（12－6、6－6）12 静岡県教員団

大同製鋼(愛知) 22（13－6、9－4）10 常盤工業(岐阜)

▽同決勝

大同製鋼 28（12－11、16－2）13 本田技研

▽女子準決勝（1回戦）

田村紡(三重) 19（12－2、7－2）4 城北ク(静岡)

ブラザー工業(愛知) 13（8－1、5－1）2 大洋紡(岐阜)

▽同決勝

田村紡 11（5－6、6－4）10 ブラザー工業

女子は東北宗形製作所

湯沢高の活躍目立つ

第7回東北総合室内選手権は青森県営体育館、青森西高体育館に東北6県の代表男子11、女子10チームが集り、トーナメントで行われた。

男子は2連勝を狙う仙台大(宮城)が準決勝で湯沢高(秋田)に延長の末敗れる大波乱があった。決勝は岩手教員ク－湯沢高の顔合せから岩手教員クが攻守に一日の長を示して初優勝した。岩手代表の優勝は2年ぶり3度目。

女子は前回同よう東北宗形製作所(福島)と全和洋(秋田)の決勝となり東北宗形製作所が後半押し切って初優勝、全和洋の4連勝を阻んだ。福島代表の優勝は初めて。

実業団がタイトルを握ったのは第3回(昭42)の三菱鉛筆(山形)以来のことである。

▽男子1回戦（3試合）

聖光学院高(福島) 12（7－5、5－3）8 三本木高(青森)

古川工高(宮城) 18（11－11、7－4）15 青森マツダ(青森)

SGク(福島) 25（10－18、15－2）20 大曲農高(秋田)

▽同準々決勝

仙台大(宮城) 34（18－4、16－5）9 聖光学院高

湯沢高（秋田）18（9−4、9−11）15 岩手大（岩手）
古川工高 25（14−7、11−6）13 東根工高（山形）
岩手教員ク（岩手）28（14−4、14−10）14 SGク

▽同準決勝

湯沢高 18（5−9、10−6：2−0、1−0）15 仙台大
岩手教員ク 23（12−7、11−8）15 古川工高

▽同決勝

岩手教員ク 22（11−5、11−10）15 湯沢高

▽女子1回戦（2試合）

涌谷高（宮城）9（4−2、5−2）4 六郷高（秋田）
米沢女高（山形）3（0−1、3−1）2 古川女高（福島）

▽同準々決勝

全岩手 9（6−4、3−1）5 青森西高（青森）
花巻北高（岩手）4（1−2、3−0）2 小高農高（福島）
東北宗形製作所（福島）8（4−5、4−2）7 涌谷高
全和洋 10（5−1、5−2）3 花巻北高

▽同決勝

東北宗形製作所 10（4−4、6−4）8 全和洋

小禄、圧倒の5連ぱ

▼第6回全沖縄高校新人大会（4月・沖縄高）

▽男子準々決勝

浦添 29−14 北農
沖縄 9−7 那覇
那覇商 8−6 宮古
首里 7−7 真和志

▽同準決勝

首里 6−3 那覇商
浦添 8−2 沖縄

▽同決勝

浦添 13（7−4、6−0）4 首里

浦添高は初優勝

▽女子準々決勝

首里 5−4 那覇商
浦添 11−5 沖縄
宮古 10−9 北山
小禄 13−3 知念

▽同準決勝

首里 6−3 浦添
小禄 15−3 宮古

▽同決勝

小禄 10（7−1、3−0）1 首里

小禄高は5連勝

中京ク、名城クと得失点差

▼第11回愛知クラブリーグ（名古屋）

名城ク 19−12 愛教ク
桜丘会A 20−11 大江ク
中京ク 28−20 鯱ク
桜丘会A 21−20 中京ク
名城ク 18−17 鯱ク
愛教ク 15−12 大江ク
鯱ク 15−14 大江ク
愛教ク 23−22 桜丘会A
中京ク 18−11 名城ク
中京ク 19−7 大江ク
名城ク 28−17 桜丘会A
愛教ク 20−11 鯱ク
鯱ク 20−19 桜丘会A
名城ク 18−17 大江ク
中京ク 22−21 愛教ク

〔順位〕①中京ク4勝1敗、②名城ク4勝1敗③愛教ク3勝2敗④鯱ク2勝3敗④桜丘会A2勝3敗⑥大江ク5敗（1・2位は得失点差による）

〔一部順位〕①名大ク②南山ク③東山ク④桜丘会ク⑤中川ク⑥愛商ク

〔三部順位〕①東海ク、①佐織ク③東杏会③一宮ク⑤若松ク

〔女子順位〕①名古屋ク②内海ク

日新製鋼が優勝

高校女子は山陽女圧勝

▼第13回広島知事杯（4月修道高）

▽一般男子準々決勝

広工大 20−17 広商大
日新製鋼呉 19−8 日本鋼管福山
修道ク 22−9 全商大
三菱レ大竹 15−14 広島大

▽同準決勝

修道ク 23−9 広工大
日新製鋼呉 14−13 三菱レ大竹

▽同決勝

日新製鋼呉 20（6−6、14−5）11 修道ク

▽高校男子準々決勝

三津田 16−7 松本商
呉工 12−8 修道
城北 不戦勝 呉商
広 12−7 山陽

▽同準決勝

呉工 11−9 三津田
呉商 9−7 広

▽同三位決定戦

広 13−10 三津田高

▽同決勝

呉工 11（5−5、6−5）10 呉商

▽高校女子1回戦（二試合）

呉 5−0 豊栄
戸手商 4−3 宮原

▽同準決勝

山陽女子 16−0 戸手商
広島一女商 6−2 呉商

▽同決勝

山陽女子 15（8−0、7−0）0 広島一女商

・・・・・

編集後記

・・・・・

グンメルスバッハも無事終了、さすがに世界一流のチームです。日本にも大きな影響を残して帰国しました。

このグンメルスバッハの特集という形を今回はとりました。

オリンピック予選、まずは日本開催が確定し、一まずはほっとしたところですが、財政・運営面をはじめとして残された問題は山積しています。一つ一つ解決していかなければなりません。ハンドボール界をあげてこの問題にとりくんでいきましょう。（T・F）

現代スポーツ百科事典

責任監修 日本体育協会

●予約受付中！（受付期間45年8月末日まで） 予約特価7,500円（定価8,000円） ●配本＝45年9月

日本体育協会の全面的協力を得た日本初の本格的スポーツ百科事典！

五大特色

1. 堂々4000項目におよぶ日本初の本格的スポーツ百科事典！
2. カラー写真、各種図版を満載！
3. 日本体育協会のもとに一流執筆陣！
4. 事典編集の〝壁〟を破る革命的編集！
5. 豪華な装幀、堅牢な造本！

●推せん者……………………
松田恒次氏・美濃部亮吉氏・栗本義彦氏・西村三郎氏・石原慎太郎氏・ブランデージ氏・石井光次郎氏・赤石清悦氏・河野義克氏・古橋広之進氏



本事典の体裁 判型＝B5判／内容＝本文九六〇頁、写真・図版計約一、五〇〇頁、口絵六四頁／装幀・造本＝表紙・布クロス、2色箔押し、函入り（3色オフセット印刷）ビニールカバー付

最寄りの書店にご注文下さい

写真と図解による **ハンドボール**

荒川清美・石井喜八共著 ¥400

ハンドボール界の鬼才とうたわれる著者が長い間の研究成果を自らの写真と図で描いた斯界待望の技術書。

〈主要目次〉 I競技の概説と歴史 1.ハンドボール競技の概説 2.ハンドボールの歴史 II個人技術 3.ルボールを扱う 4.ボールを扱う練習法 5.身体を扱う（ボディコントロール） 6.シュートとその練習 7.ゴールキーパー III集団技術 8.コンビネーションプレーによる防御 9.コンビネーションプレーによる攻撃 10.攻防への移動練習 11.デッドタイムからインプレーへ IVハンドボールの科学的基礎

大修館書店 東京・神田錦町3－24 振替／東京40504



洋装服飾専門商社㈱三景・東京都千代田区岩本町3－2－10 〒101

日本ハンドボール協会編
「ハンドボール」
第八十六号
昭和四十年六月十（　）
第三種郵便物認可
昭和四十六年四月二十五日印刷
昭和四十六年五月一日発行
発行所　日本ハンドボール協会
（　）都渋谷区神南一－一－一
電話　大代表(467)三一一一
振替　東京五八三四八番
編集兼発行人　保坂周助
定価百五十円
（年間購読11回・千二百円）